

令和2年度 厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）  
分担研究報告書

発達障害者支援センター・教育センター職員を対象とした  
研修プログラムの効果検証

研究代表者 辻井 正次 中京大学現代社会学部教授  
研究分担者 西牧 謙吾 国立障害者リハビリテーションセンター  
発達障害情報・支援センター長  
研究分担者 岡田 俊・国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所部長  
研究分担者 笹森 洋樹 国立特別支援教育総合研究所発達障害教育推進センター  
上席総括研究員  
研究分担者 日詰 正文 独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園  
事業企画局研究部部長<sup>1</sup>  
研究分担者 井上 雅彦 鳥取大学医学系研究科教授  
研究分担者 岩永 竜一郎 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授  
研究分担者 黒田 美保 名古屋学芸大学ヒューマンケア学部教授  
研究分担者 鈴木 勝昭 宮城県子ども総合センター附属診療所非常勤医師<sup>1</sup>  
研究分担者 吉村 優子 金沢大学人間社会研究域学校教育系准教授  
研究分担者 三上 珠希 弘前大学医学研究科附属子どものこころの発達研究センター特任助教  
研究分担者 明翫 光宜 中京大学心理学部教授  
研究分担者 浜田 恵 名古屋学芸大学ヒューマンケア学部講師  
研究分担者 高柳 伸哉 愛知東邦大学人間健康学部准教授

研究要旨

発達障害支援に携わる支援者・職員らの知識の向上を促す標準的な発達障害プログラムを開発するため、コンソーシアムによる意見交換会と発達障害に関わる専門家・支援者ら26名を対象とした試行的研修により内容的妥当性を検証し、本研修のプログラム内容を構成した。その後、発達障害者支援センターと教育センター職員を主な対象としたオンライン研修を実施し、参加者130名への事前事後アンケートの結果から本研修プログラムの効果を検証した。有効回答87名の分析結果から、本研修プログラムにより発達障害の理解と支援に有用なアセスメント・ツールや支援技法に関する認知度が増加し、支援者・職員らの知識を向上する一定の効果が確認された。開発された研修プログラムと資料は受講者のいる発達障害者支援センターと教育センターに配付し、各地域での研修に関する課題の解決と研修実施の促進に寄与することが期待される。

---

<sup>1</sup> 所属は2021年3月時点

## A. 研究目的

2019 年度にて実施された本研究の研究代表者・研究分担者によるコンソーシアム・メンバーで実施した意見交換会における発達障害研修に関する検討や、全国の発達障害支援関連機関・自治体への研修実態調査の結果、発達障害者支援センターや教育センターでの研修実施率が他機関より比較的高いこと、自治体等の中では研修の実施自体がみられないものもあることが明らかとなった。研修実施における負担や研修実施の地域差・機関差などの課題解決のため、従来の専門性の高い講師を各地に招聘する形態の研修ではなく、全国共通で活用できる標準的なプログラム資料を用いて各地域・機関の職員が内部あるいは周辺の支援者らを対象に研修を実施できる形態が望まれる。そこで2019年度には標準的な研修プログラム案を提案した（辻井ら、2020）。一方で、研修プログラムを普及するにあたっては、研修講師を担う者に一定の知識や経験も求められる。

そこで本研究では、全国の発達障害者支援センターや教育センターの職員で数年務めた職員が、将来的に本研究で開発する研修資料等を用いて研修講師を担い、各センター内の新任職員研修や地域の支援者らを対象とした研修を実施することを想定し、研修プログラムの具体的な内容や資料の開発と効果検証を行う。研修プログラムの開発では発達障害支援に関わる専門家や支援者らを対象とした試行的研修を行い、本研修の難易度や内容の妥当性、時間配分等の検討を行う。その後、発達障害者支援センターと教育センターの職員を主な対象とした研修会を実施し、参加者への事前事後調査から本研修プログラムの効果検証を行う。なお、本研修プログラムは発達障害児者の理解と支援に関して標準的なアセスメント・ツールと支援技法等について広く紹介するものであることから、研修の効果として各種アセスメント・ツールや支援技法等に関する認知度の向上が見込まれる。

## B. 研究方法

### 1. 研修プログラムの開発

2019 年度に引き続き、研究分担者として参画する国立機関・大学等の専門家らとともにコンソーシアムを構築し、発達障害研修に関する状況と課題について共有した。研修プログラムの開発に向け、コンソーシアムに所属する専門家を中心メンバーとした意見交換会を3回（2020年5月23日、6月28日、8月29日）開催し、研修に必要な要素や取り扱うべき標準的なアセスメント・ツールと支援技法に関して、発達障害児者の特性や情緒・行動面、社会生活などの多面的な理解や適応促進につながる要因を網羅しうる構成として整理した。

### 2. 研修プログラムの内容的妥当性の検証

作成した研修プログラムについて、試行的に発達障害に関わる専門家・支援者らを対象に研修会を2回（2020年10月17-18日、10月31日-11月1日）開催し、合計26名（第1回14名、第2回12名）が参加した（表1）。本研修の開発情報は発達障害・情報支援センターの研修情報サイトに掲載され、参加者は自ら希望して本研修への申し込みを行った。参加希望者には本研究の目的について文書による説明を明記し、事後アンケートへの協力を依頼した。参加者へのアンケート調査により本研修プログラムの時間配分の妥当性や内容の適切性（分量、難易度、支援現場での活用性）について、それぞれ3件法（○（適切）・△（若干の修正が必要）・◆（要検討））で検証した。その結果を踏まえ、2020年12月1日の意見交換会で本研修プログラムの内容や時間配分の調整を行った。

表1 試行的研修に参加した専門家・支援者の性別と参加回の

専門家・支援者	研修参加回		合計
	第1回	第2回	
男性	7	6	13
女性	5	8	13
合計	12	14	26

表2 第3-6回の参加者の機関種別、参加回による内訳

	研修参加回				合計
	第3回	第4回	第5回	第6回	
発達障害者支援センター	4	11	12	27	54
教育センター	1	2	10	5	18
その他	4	3	6	2	15
合計	9	16	28	34	87

### 3. 発達障害児者の支援に関する標準的な研修プログラムの効果検証

1) 調査対象 意見交換会と専門家・支援者らを対象とした試行的研修会を経て開発したプログラムについて、本研修プログラムの効果検証を目的に、発達障害者支援センターと教育センターに所属する職員を主な対象としてオンライン研修会を開催した。本研修は国立障害者リハビリテーションセンターに属する発達障害情報・支援センターの研修情報サイトに掲載され、希望者によるオンラインでの申込みを受け付けた。掲載においては、先の試行的研修との連続性から第3-6回と示して記載したため、本研究でも発達障害者支援センター・教育センター職員向けの研修は「第3-6回」と表記する。

本研修を受講した発達障害者支援センターと教育センターの職員を主な対象とした研修会の参加者は計4回でのべ130名（発達障害者支援センター71名、教育センター27名、その他機関32名）であった。そのうち、事前アンケートの回答者は121名（93.1%）で、事後アンケートの回答者は106名（81.5%）であった。特に事後アンケートでは同一機関から交代で受講した参加者がいた場合、2名分の回答が1名のみとなることも影響し、回収率が低下した。事前・事後アンケート両方に回答した者は合計87名（発達障害者支援センター54名、教育センター18名、その他15名）で有効回答率は66.9%であった。事前事後アンケートの回答を得られた参加者について、機関種別と参加回の内訳を表2に示す。

2) 調査時期 オンライン研修会は4回（2020年12月19-20日、2021年1月9-10日、1月23-24日、1月30-31日）実施し、参加者への事前事後アンケート結果の比較による効果検証を行った。

3) 調査内容 研修参加者に発達障害支援に用いる①アセスメント・ツールや②支援技法に関する認知度・活用度、③ライフステージにおける課題・支援と支援体制の理解について尋ね、本研修の事前事後での結果を比較した。また、事後アンケートでは④本研修への評価や発達障害研修に関する課題についての回答も求めた。①と②については、「0.聞いたことがない」から「4.現在、使うことがある」までの5件法で尋ねた。また③については「0.よく分からない」から「4.具体的内容とその重要性を説明できる」までの5件法で尋ねた。④については本プログラムの充実度や分かりやすさ、研修内容が今後地域支援に活用できるかや支援の具体的な実践をイメージすることができたなどについて、「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」までの5件法で尋ねた。さらに、参加者自身が今後、本研修の講師を務めると想定した場合に必要な資料・サポートについて複数回答可の選択肢と自由記述で尋ねた。最後に、各機関で取り組んでいる発達障害支援における課題・ニーズについて自由記述での回答を求めた。

4) 手続き オンライン研修会の実施にはZoomミーティング（Zoom Video Communications）を用いた。事前事後アンケートにはGoogleフォーム

(Google) を用いたインターネット調査を実施した。参加者には、本研究の目的と本研修のねらいについて文章にて明示し、事前事後アンケートの実施は任意のものとして協力を求め、アンケートを回答しないことによる不利益はないことを明示した。また、本研究は研修開発だけでなく、関連機関の職員への研修実施と普及に向けた取り組みも兼ねていることから、本研修の2日間全てに参加できない場合であっても、同一機関から職員複数名で参加し、1・2日目を交代で受講するなどの変則的な形態での参加者も受け入れた。

本研究の目的の一つである本研修プログラムの汎用性向上を目指し、2021年1月に実施した3回の研修会では、可能な限り各パートの研修資料作成者以外の研究代表者・研究分担者が講師を務めた。各研修会終了後に実施した研究代表者・研究分担者等による振り返りや4回分の事前事後アンケート結果を含め、2021年2月28日に意見交換会にてプログラムの効果検証の確認と、今後の普及に向けた方策について検討を行った。

#### (倫理面への配慮)

研究代表者の所属機関において倫理審査申請を行い、承認を得た(審査番号:201910)。本研究で実施した研修(全6回)は全て発達障害情報・支援センターの研修情報サイトに掲載され、参加者は本研修を自ら希望し申込みをした者である。さらに、申込者に対して本研修の目的と本研修の内容評価についての任意での協力を明示し、回答は強制しなかった。以上のことから、本研究における倫理的な問題はないものと判断される。

### C. 研究結果

#### 1. 研修プログラムの開発

本研修プログラムは「①アセスメント・ツールと個別の支援計画(11パート)」、「②適応行動(2パート)」、「③家族支援(きょうだい支援)(2パ

ート)」、「④本人支援(発達段階別、計12パート)」、「⑤PDCAサイクルから支援の質を向上させていく(3パート)」の合計5部30パートから構成され、アセスメントから支援技法、ライフステージに沿った支援と多岐にわたることから、研修は2日間(各日9-17時予定)で1回の実施計画とした。各パートの時間配分と2日間に渡る実施時間のバランスを勘案して研修番号と異なる順番で編成し、「③家族支援(きょうだい支援)」を2日目に移し、「④本人支援」における幼児期支援を1日目に実施することとした。本研修プログラムの構成を表3・4に示す。

#### 2. 研修プログラムの内容的妥当性の検証

本研修プログラムに関するアンケート結果から、プログラムの構成については概ね肯定的な評価が得られた一方、内容の一部簡略化や専門用語に関するわかりやすい表現へ言い換える必要性などが見いだされた。これらの結果を踏まえ、発達障害者支援センターと教育センターに所属する職員を主な対象とした計4回の研修に用いる資料に反映した。さらに、研修終了後に研究分担者らによる振り返りを行い、本研修を受講した発達障害者支援センターや教育センターの職員が研修講師として担当することが可能とするために、講師が読み上げる研修資料の原稿の追加などのバージョンアップを施した。研修プログラムの資料は、パートごとにMicrosoft社のPowerPointで作成され、各地の研修で利用できるファイルとして作成した。

#### 3. 発達障害児者の支援に関する標準的な研修プログラムの効果検証

事前事後アンケートについて、研修受講前後での各種アセスメント・ツールや支援技法等に関する認知度の変化を検証するため、ノンパラメトリック検定(Wilcoxonの符号付き順位検定)を行い、事前事後で回答項目の分布がどのように変化したのかを統計的に検証した。本研究

表3 本研修プログラムの構成（1日目）

講義名（1日目）	作成担当者
1) アセスメント・ツールと個別の支援計画	
1 発達障害を客観的なツールから理解する	辻井正次
2 客観的ツールでの理解と医学的診断	岡田 俊
3 発達検査・知能検査のアセスメント	明翫光宜
4 ASD特性のアセスメントツール	浜田 恵
5 ADHD特性のアセスメントツール	高柳伸哉
6 LD特性のアセスメントツール	吉村優子
7 協調運動（DCD特性）のアセスメントツール	岩永竜一郎
8 感覚特性のアセスメントツール	岩永竜一郎
9 就学時健診と5歳児発達健診	三上珠希
10 個別の（教育）支援計画	井上雅彦
11 二次障害、問題行動	井上雅彦
2) 適応行動	
1 適応行動とVineland-II適応行動尺度	黒田美保
2 幼児の適応行動評定 TASP	高柳伸哉
4) 本人支援1	
1. 幼児期	
1 適応行動：身辺自立の支援	三上珠希・森 裕幸
2 運動・感覚あそび	池田千紗
3 遊びを媒介とした社会性の支援	黒田美保・浜田 恵
4 言語面の支援	吉村優子

表4 本研修プログラムの構成（2日目）

講義名（2日目）	作成担当者
3) 家族支援（きょうだい支援）	
1 家族支援の重要性、ペアレント・プログラム	高柳伸哉
2 ペアレント・メンター、ペアレントトレーニング、きょうだい支援	井上雅彦
4) 本人支援2	
2. 児童期	
1 適応行動：環境調整・感情調整	明翫光宜
2 学習に関する指導・支援	笹森洋樹
3 発達性協調運動症・協調運動面への支援	岩永竜一郎
4 友達作りと社会的スキル	黒田美保・浜田 恵
3. 青年期	
1 自己理解	岡田 俊
2 適応支援：精神科的併存症の理解と予防	鈴木勝昭
3 社会性	辻井正次
4. 成人期	
1 成人期・高齢期の相談	日詰正文・辻井正次
5) PDCAサイクルから支援の質を向上させていく	
1 特別支援教育における研修	笹森洋樹
2 保健・医療・福祉等における研修	西牧謙吾
3 実践を科学的に検証可能なものにしていくために	辻井正次

の場合、事前事後得点の比較により、標準化された統計量がプラスであれば事後において肯定的な回答への変化がみられ、マイナスであれば否定的な回答への変化がみられることを示し、それぞれが統計的に有意に起こっているかを検証している。

1) アセスメント・ツールにおける事前事後変化  
アセスメント・ツールの検定結果一覧について表5に示す。事前事後の回答割合の変化では、「WISC-IV」や「WAIS-IV」、「日本版 KABC-II」、「田中ビネー知能検査」を除く全ての項目で、事後アンケートで肯定的な回答の増加が有意であった。

また、各項目の事前事後における具体的な回答割合の変化について検証するため、選択肢の変化率を図1-4に示す。このグラフは、各項目の選択肢について事後アンケートでの割合-事前アンケートでの割合で算出したもので、事前アンケートと比較して事後アンケートにおいて各選択肢がどの程度増減したかを参加者の割合(%)で示している。割合がプラスの値であればその選択肢が事後アンケートで増加したことを

示し、マイナスの値であれば事後アンケートで減少したことを示している。肯定的な回答への変化がみられた項目については、全体的に「0. 聞いたことがない」「1. 聞いたことはある」回答の割合が減少し、それらが「2. 内容を知っている」回答などに変化している様子がうかがえる。また、各項目で機関種別での差もみられ、たとえば「1-6. 日本語版 M-CHAT」では、発達障害者支援センター職員では目立った回答の変化がみられない一方、教育センター職員では「0. 聞いたことがない」回答が40%以上減少し、「2. 内容を知っている」回答が40%近く増加した。特に発達障害特性などに関するアセスメント・ツールに関しては、教育センター職員における改善率が顕著に高い傾向が示された。なお、項目によっては事前に肯定的回答であったものが事後に否定的回答に変化したものもみられた。たとえば「1-4. 田中ビネー知能検査 V」では教育センター職員において、事後に「1. 聞いたことはある」回答が5%減少しただけでなく、「3. これまでに使ったことがある」回答が15%減少し、「2. 内容を知っている」回答が20%増加した。同様の減少は、いくつかの項目で散見された。

表5 アセスメント・ツールの事前事後における回答変化の検定 (Wilcoxon の符号付き順位検定)

項目名	N	検定統計量	標準誤差	標準化された 検定統計量
1-1. WISC. IV	87	102.50	21.03	0.808
1-2. WAIS. IV	87	154.50	29.32	0.955
1-3. 日本版KABC-II	87	180.00	32.52	0.923
1-4. 田中ビネー知能検査V	87	212.00	37.43	0.975
1-5. 新版K式発達検査	87	311.50	41.26	2.629 **
1-6. 日本語版M-CHAT	87	617.00	67.51	3.362 **
1-7. PARS-TR	87	680.00	73.97	3.373 **
1-8. ADOS. 2日本語版	87	891.00	83.28	4.485 ***
1-9. ADHD-RS	87	672.00	66.41	4.54 ***
1-10. Conners3日本語版	87	1427.50	111.55	5.894 ***
1-11. CAARS日本語版	87	1125.00	94.08	5.448 ***
1-12. CAADID	87	1784.50	135.50	5.963 ***
1-13. CLASP	87	1558.00	120.92	6.05 ***
1-14. STRAW-R	87	719.00	68.54	4.8 ***
1-15. JMAP	87	1311.00	107.19	5.556 ***
1-16. SP感覚プロファイル	87	722.00	77.01	3.513 ***
1-17. CBCL6-18	87	1223.00	104.96	5.088 ***
1-18. SDQ	87	1522.50	120.10	5.795 ***
1-19. DSRS-C	87	1670.00	123.40	6.6 ***
1-20. CES-D	87	1315.00	104.89	5.968 ***
1-21. SCAS	87	1891.00	131.48	7.191 ***
1-22. CMAS	87	1809.00	129.90	6.882 ***
1-23. Vineland-II	87	451.50	52.08	3.6 ***
1-24. TASP	87	1587.50	121.15	6.281 ***
1-25. PNPS	87	1308.50	102.44	6.301 ***
1-26. スペース (SPACE)	87	2210.50	153.63	6.975 ***
1-27. DSQ-IID	87	1653.00	120.10	6.882 ***

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

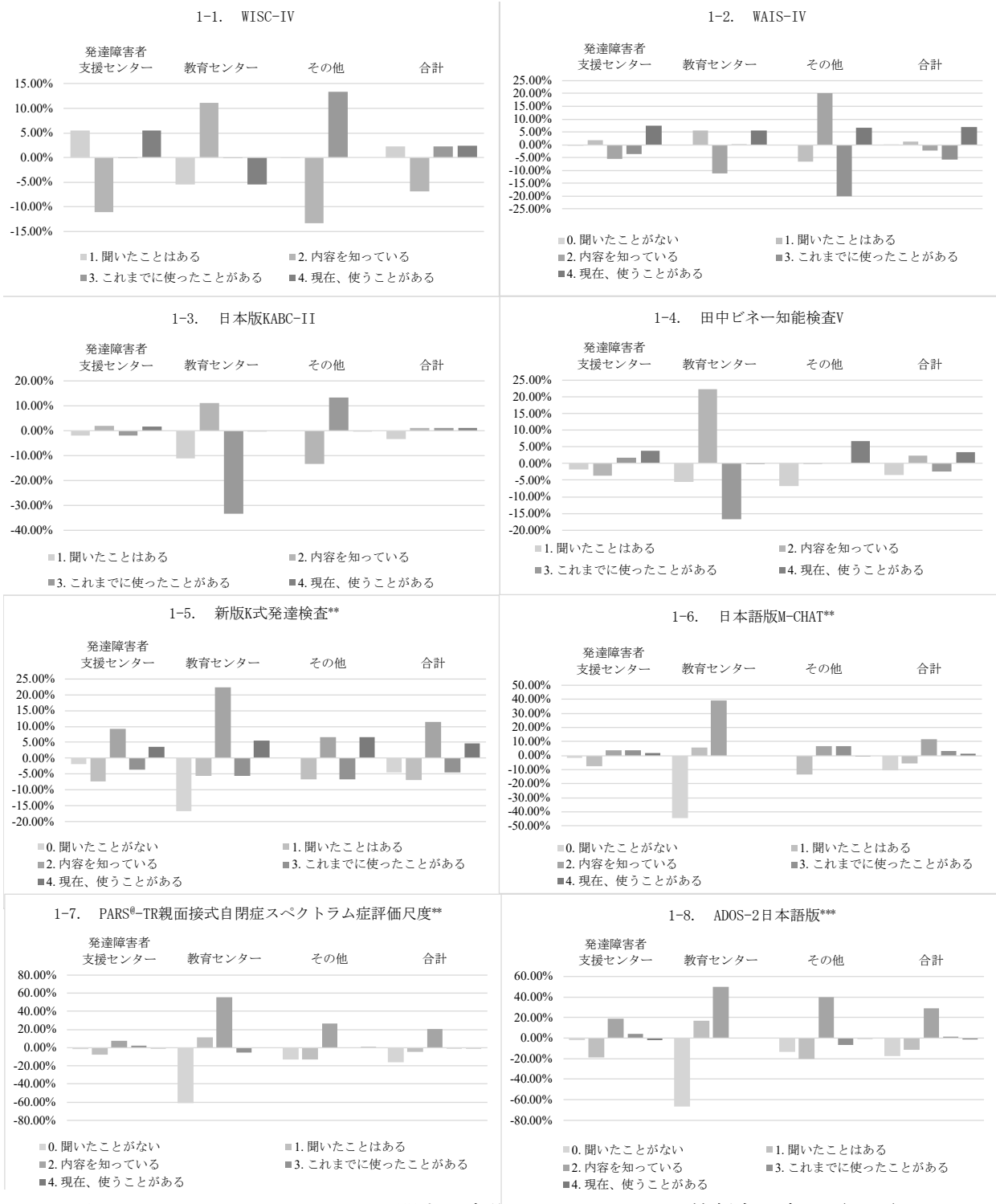


図1 アセスメント・ツールに関する事後アンケートでの回答割合の変化(1-8)  
 項目名について\*\*,\*\*は、Wilcoxonの符号付き順位検定における有意確率を表している。  
 \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$



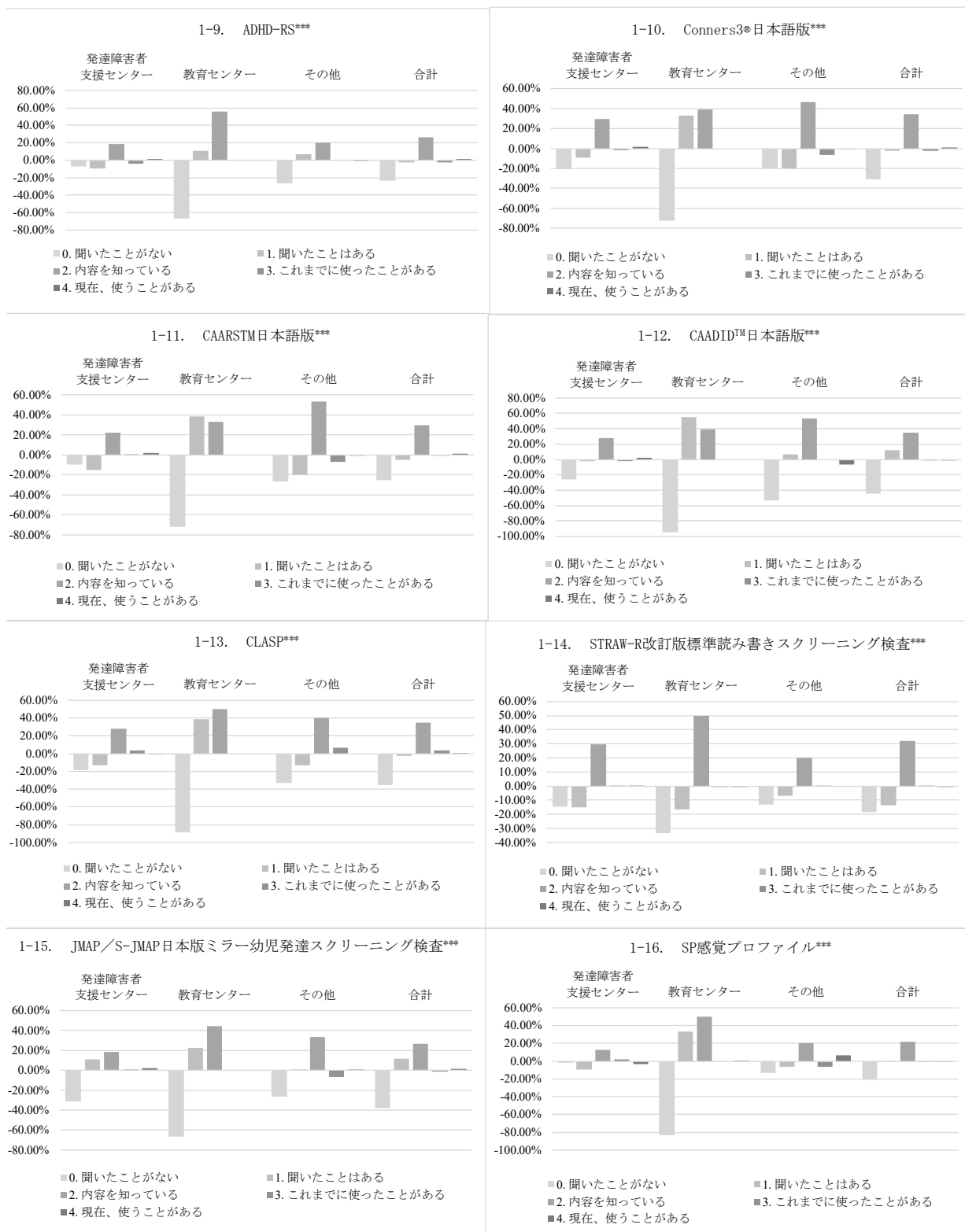


図2 アセスメント・ツールに関する事後アンケートでの回答割合の変化(9-16)  
 項目名について\*\*\*は、Wilcoxonの符号付き順位検定における有意確率を表している。

\*\*\* $p < .001$

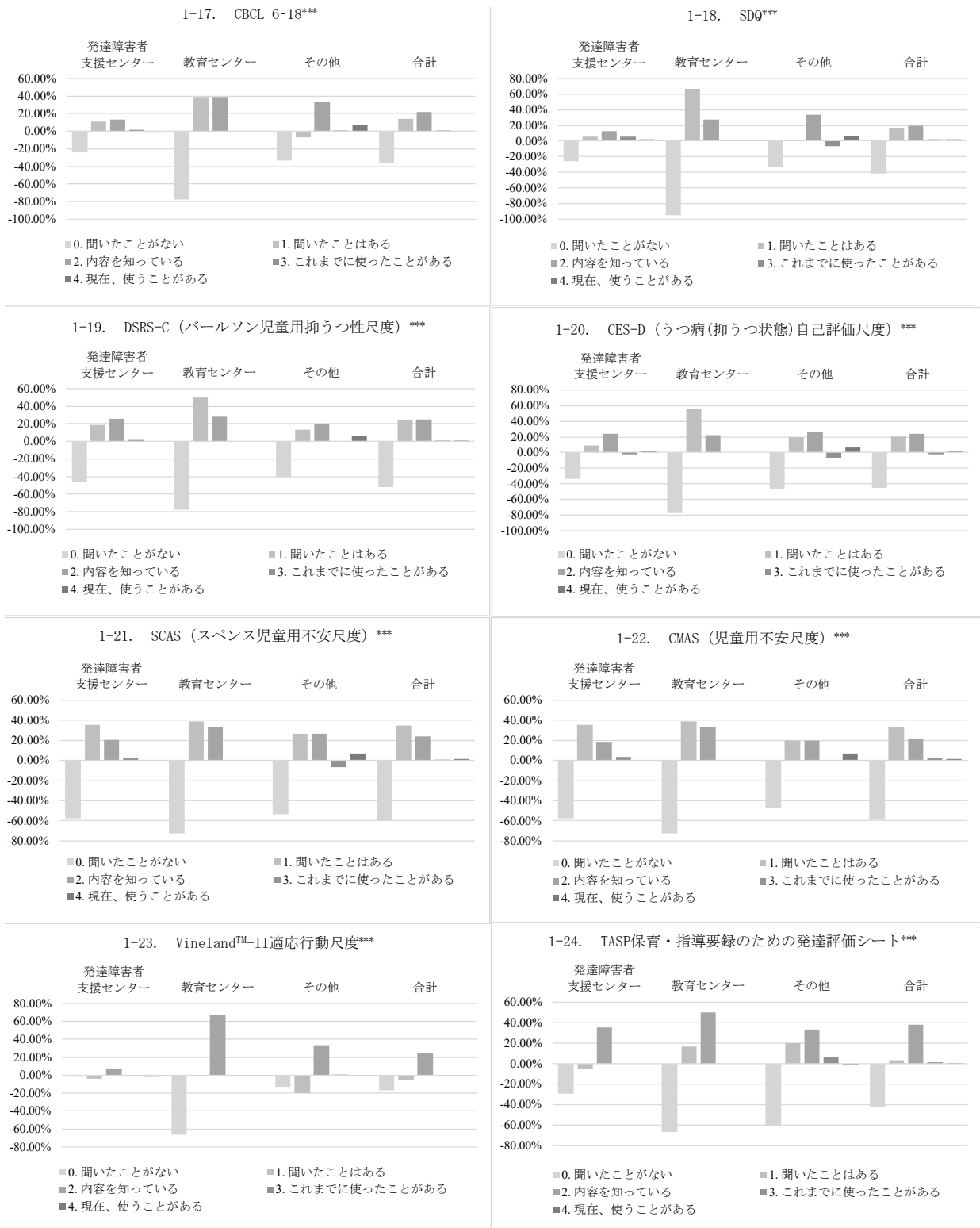


図3 アセスメント・ツールに関する事後アンケートでの回答割合の変化(17-24)  
 項目名について\*\*、\*\*\*は、Wilcoxonの符号付き順位検定における有意確率を表している。  
 \*\*\* $p < .001$

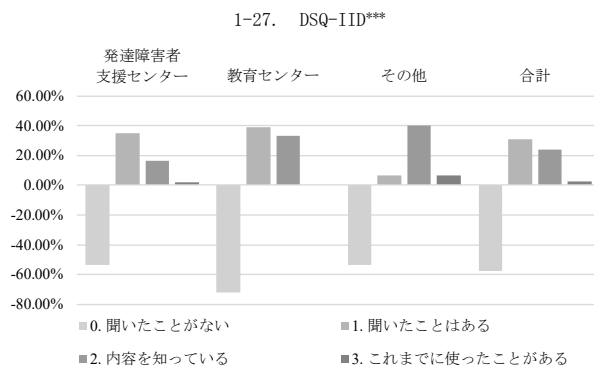
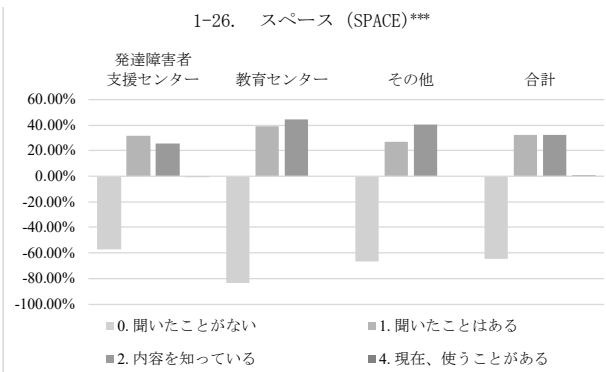
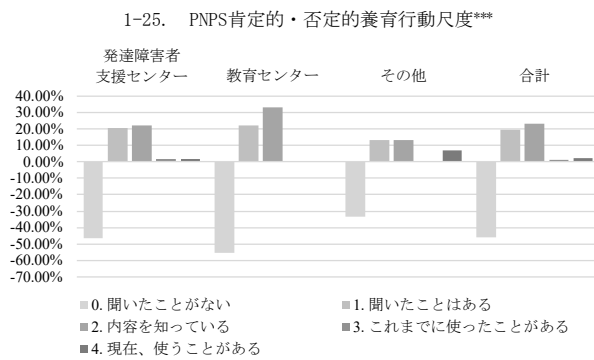


図4 アセスメント・ツールに関する事後アンケートでの回答割合の変化 (25-27)  
項目名について\*\*、\*\*\*は、Wilcoxonの符号付き順位検定における有意確率を表している。

\*\*\* $p < .001$

## 2) 支援技法における事前事後変化

支援技法に関する検定結果一覧について、表6に示す。事前事後で肯定的回答の増加が有意であった支援技法は、「2-3. 言語療法」や「2-4. ジャスパー (JASPER)」、「2-5. ESDM」、「2-10. フレンドシッププログラム」、「2-13. ライフログクリエイター」、「2-15. ピアーズ (PEERS)」、「2-16. 自閉スペクトラム症専門ショートケア」で、アセスメント・ツールと比較すると改善の項目数は少なかった。

また、各項目の事前事後における具体的な回答割合の変化について検証するため、支援技法各項目における選択肢の変化率を図5-7に示す。全体的に発達障害者支援センター職員の変化よりも教育センター職員における回答割合の改善率が高い傾向がみられた。特に「2-4. ジャスパー (JASPER)」や「2-5. ESDM」等の、我が国ではまだ広くは普及されていない早期支援プログラ

ムについて、教育センターでの認知度の向上が顕著であった。一方、「2-10. フレンドシッププログラム」や「2-13. ライフログクリエイター」、「2-15. ピアーズ (PEERS)」、「2-16. 自閉スペクトラム症専門ショートケアプログラム」では、発達障害者支援センター職員・教育センター職員とも認知度の向上が大きく、有用な支援技法であるもののこれまで認知されていなかった様子も伺えた。

一方、アセスメント・ツールでの結果と同様に、肯定的な回答が減少して否定的な回答が増えるという、一見悪化したようにもみられる減少は支援技法においてもみられた。例えば「2-18.ペアレント・プログラム」や「2-19. ペアレント・トレーニング」では、教育センター職員に置いて「2. 内容を知っている」回答がいずれも30%増加している一方、「3. これまでに使ったことがある」回答がそれぞれ20%前後減少した。

表6 支援技法の事前事後における回答変化の検定 (Wilcoxon の符号付き順位検定)

項目名	N	検定統計量	標準誤差	標準化された 検定統計量
2-1. 構造化視覚支援	87	81.50	19.99	0.25
2-2. 応用行動分析	87	137.00	27.97	0.375
2-3. 言語療法	87	311.50	39.53	2.745 **
2-4. ジャスパー (JASPER)	87	1396.00	114.10	5.487 ***
2-5. ESDM	87	908.00	82.25	5.021 ***
2-6. 環境調整	87	74.00	21.38	-0.538
2-7. 感情理解感情調整	87	765.00	91.67	2.193
2-8. 感覚統合療法	87	273.00	42.11	1.318
2-9. SST	87	170.00	49.48	-1.9
2-10. フレンドシッププログラム	87	1693.00	124.65	6.719 ***
2-11. ストレスコーピング	87	406.00	61.41	0.887
2-12. ソーシャルサポート	87	545.50	89.38	0.056
2-13. ライフログクリエイター	87	2027.50	144.85	6.818 ***
2-14. 自己理解	87	218.00	58.48	-1.659
2-15. ピアーズ (PEERS)	87	1623.00	122.30	6.276 ***
2-16. 自閉スペクトラム症専門ショートケア	87	1503.50	115.89	6.088 ***
2-17. ICF	87	247.50	39.74	1.472
2-18. ペアレントプログラム	87	278.00	41.64	1.801
2-19. ペアレントトレーニング	87	320.00	46.33	1.554
2-20. ペアレントメンターの活用	87	146.00	24.80	1.653

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

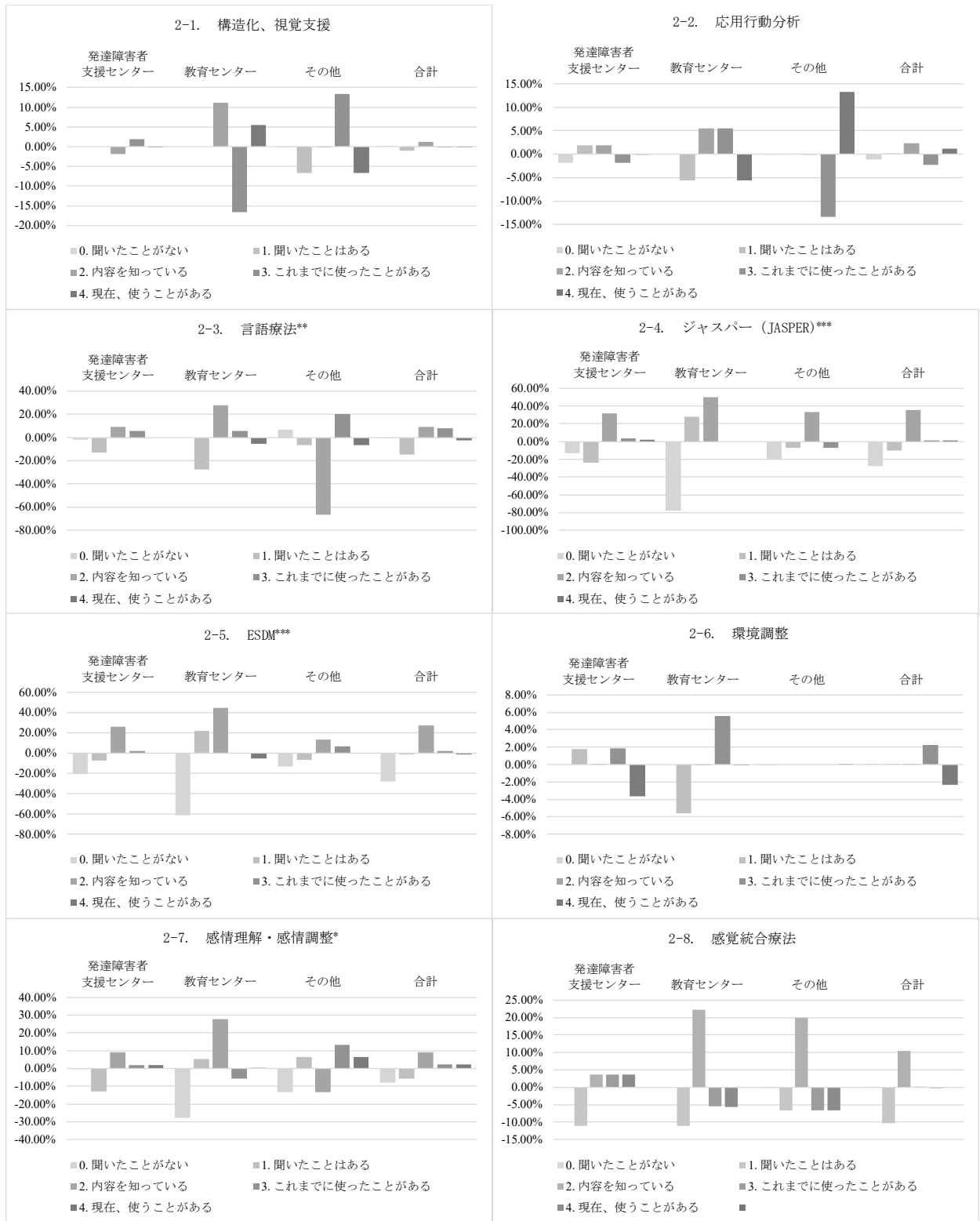


図5 支援技法に関する事後アンケートでの回答割合の変化（1-8）

項目名について\*\*\*は、Wilcoxonの符号付き順位検定における有意確率を表している。

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$



図6 支援技法に関する事後アンケートでの回答割合の変化(9-16)

項目名について\*\*\*は、Wilcoxonの符号付き順位検定における有意確率を表している。

\*\*\* $p < .001$

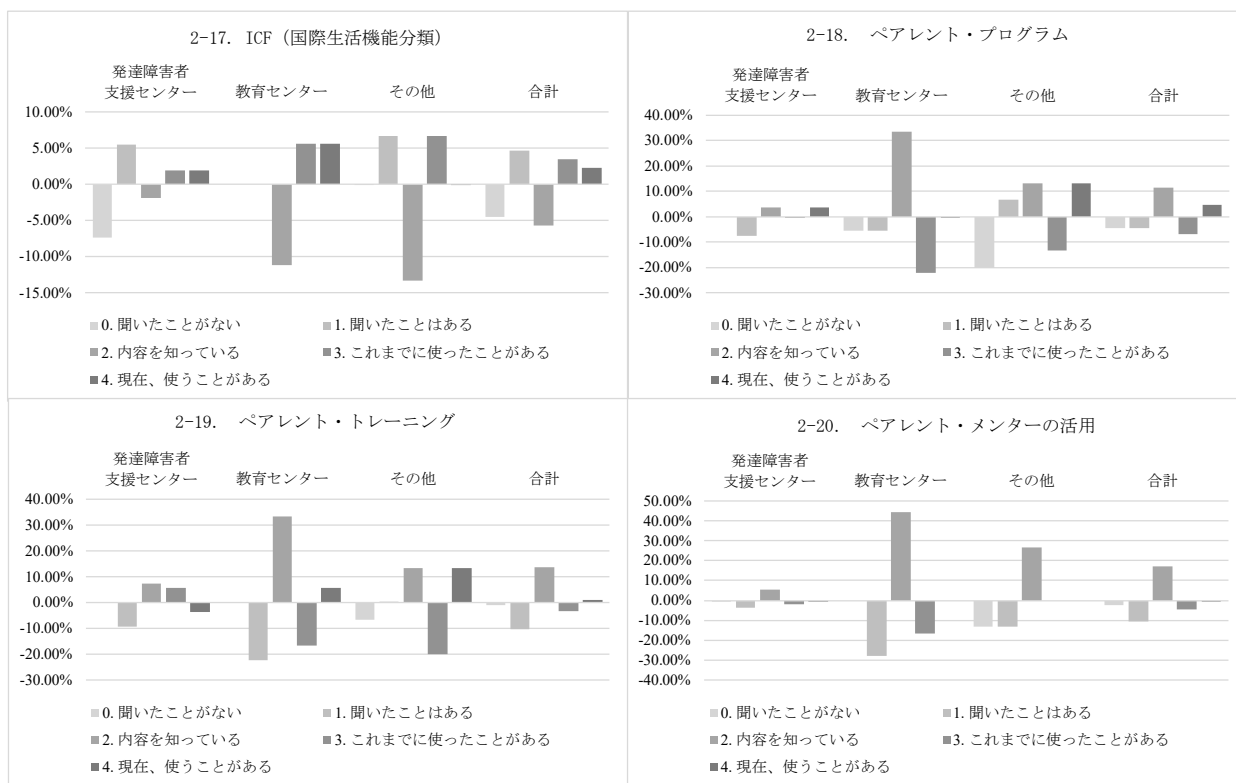


図7 支援技法に関する事後アンケートでの回答割合の変化 (17-20)

### 3) ライフステージの課題と支援における事前事後変化

発達障害児者のライフステージにおける課題と支援に関する検定結果一覧について、表7に示す。事前事後で肯定的回答の増加が有意であった項目は、「3-4. 学校における学習支援」と「3-5. 青年期以降のメンタルヘルス」のみで、アセスメント・ツールや支援技法と比較してわずかであった。

また、各項目の事前事後における具体的な回答割合の変化について検証するため、ライフステージにおける課題と支援の各項目における選択肢の変化率を図8に示す。概ね発達障害者支援センター職員の変化よりも教育センター職員における回答割合の改善率が高い傾向がみられた。特に「3-2. 就学移行における把握」や「3-5. 青年期以降におけるメンタルヘルス、医療との連携」では教育センター職員において30%近く

の肯定的回答の増加や否定的回答の減少がみられた。また発達障害者支援センター職員では教育センター職員よりも改善率は低いものの、「3-3. 特別支援教育に関する理解」や「3-4. 学校における学習支援」で10%程度の肯定的回答の増加や否定的回答の減少がみられた。

一方、アセスメント・ツールや支援技法での結果と同様に、肯定的な回答が減少して否定的な回答が増える様子がライフステージにおける課題と支援においてもみられた。例えば「3-4. 学校における学習支援」や「3-9. 地域における多機関・多職種連携」では、教育センター職員に置いて「4. 具体的な内容とその重要性を説明できる」や「3. 具体的な内容とその重要性を知っている」回答などが減少し、一つ下の回答である「2. 具体的な内容を知っている」回答などが増加した。

表7 ライフステージにおける課題と支援の事前事後における回答変化の検定  
(Wilcoxon の符号付き順位検定)

項目名	N	検定統計量	標準誤差	標準化された 検定統計量
3-1. 幼児期における医療福祉との連携支援	87	392.00	57.51	1.339
3-2. 就学移行における把握	87	581.50	76.25	1.705
3-3. 特別支援教育に関する理解	87	214.50	43.00	-0.07
3-4. 学校における学習支援	87	602.00	75.06	2.005 *
3-5. 青年期以降のメンタルヘルス	87	725.50	77.67	3.251 **
3-6. 生活支援	87	449.00	68.29	0.864
3-7. 就労支援	87	349.50	54.84	0.948
3-8. 余暇支援	87	288.50	48.09	0.842
3-9. 地域における多機関連携	87	228.00	45.87	-0.098
3-10. 国における発達障害施策の理解	87	312.50	46.83	1.377



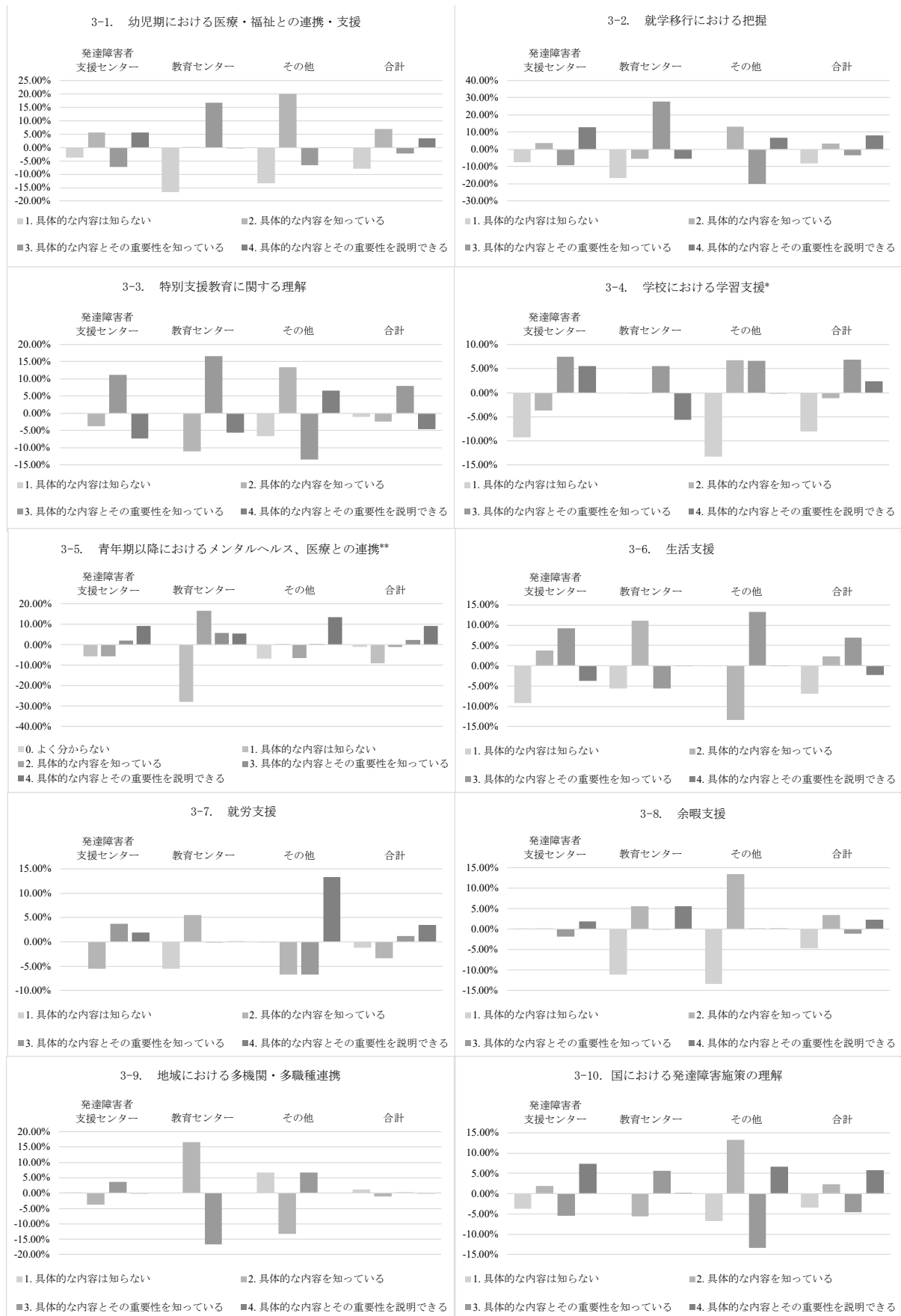


図8 ライフステージにおける課題と支援に関する事後アンケートでの回答割合の変化（1-10）

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

#### 4) 本研修に関する評価

本研修プログラムの内容等に関する参加者による評価の各項目について、図9に示した。

「4-1. 研修内容の充実度」に関しては、「4. ややあてはまる」と「5. あてはまる」の肯定的回答を合計すると参加者の9割が本研修について充実していると評価された。「4-1. 内容の分かりやすさ」に関しては、内容の充実度よりも「5. あてはまる」回答の割合は全体で20%ほど減少したものの、「4. ややあてはまる」と合計した肯定的回答では参加者の9割が分かりやすいと評価された。「4-1. 本研修のプログラム内容に関する感想（自由記述）」については、選択肢での評価を補足する傾向がみられたが、本研修は開発・効果検証として実施され、アセスメント・ツールや書籍転載等の許諾を得る前であったこともあり、参加者には資料等の配付をせずに行ったため、分量の多さとペースの速さについていくのが困難といった意見もいくつかみられた（表8-11）。

「4-2. 地域支援への活用可能性」と「4-2. 支

援の具体的な実践のイメージ化」では、肯定的評価の合計で8割前後であり、活用可能性と比較して具体的な実践のイメージ化は若干低い結果となった。「4-2. 地域支援における活用に関する感想（自由記述）」でも概ね評価と類した内容がうかがえるが、本研修はすべてオンライン研修の形態で実施され、また多岐にわたる内容を2日間に詰め込んだこともあり、具体的な技法や事例を用いた詳細な説明などを取り入れることが困難であったこともあり、参加者もイメージをすることが難しかったという意見も多くみられた（表12-14）。なお、「4-3. 本プログラムの講師を務めるとした場合の資料・サポート」については多くが「研修スライドと原稿の活用」と「専門家講師によるオリジナル動画」、「スライド解説資料の参照」が必要と回答し（それぞれ、80名、92.0%；62名、71.3%；77名、88.5%）、「専門家講師の指導が事前に受けられる」のみ37名（42.5%）と半数以下であった。また、4-3. の自由記述について表15-18に示す。

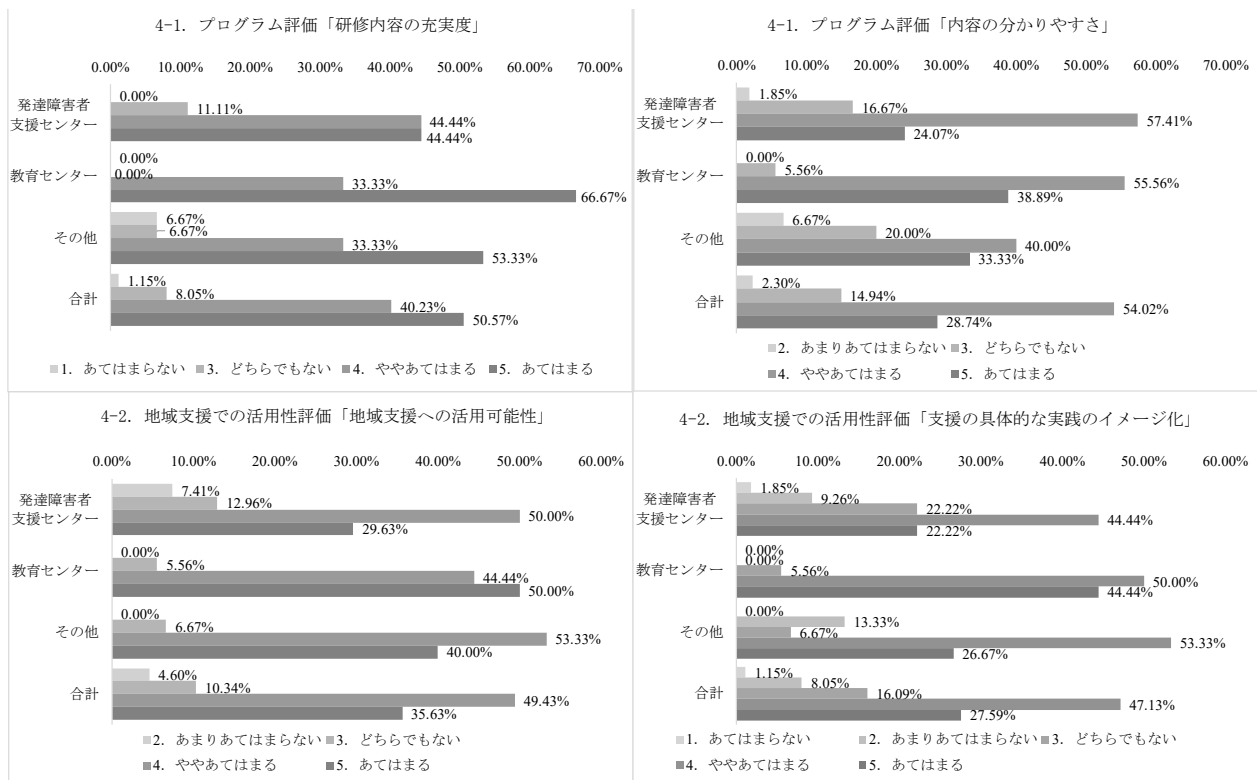


図9 本研修プログラムの評価各項目に関する機関種別の回答割合

表8 本研修のプログラム内容に関する感想①

所属機関種別	4-1. 本研修のプログラム内容に関する感想（自由記述）
発達障害者 支援センター	<p>発達段階によって変化していくニーズや支援について、順に学ぶことができたので分かりやすかったです。SST以外の集団プログラムについて勉強できたのも良かったです。初めて知ったこと等、消化しきれていない部分も多かったので、自分で調べる必要があると感じました。</p> <p>アセスメントツールの紹介では、知らなかったものも多かったですが、時間の関係上、具体的な内容までは分からないので、もう少し絞って説明しても良かったかと思えます。いち心理士としては勉強になりましたが、今後、対象者として誰を想定しているのかなとは思いました。あれだけのコマ数と講師がいて、皆さんが時間内に収めたのはすごいと思えました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本研修の目的がこのアンケートを見るまで、「センター職員の研修に活用するため」ということをわからなかった。（私が見落としていたからかもしれない）</li> <li>・内容以前に、資料が手元になく、講師の先生方のお話もスピードが早くなりがちで、画面を見てお話を聞きながら、メモするので、精一杯だった。</li> </ul> <p>内容については、項目によって充実具合やわかりやすさに差があったので、「どちらでもない」にした。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障害者支援センターは、一定の個別かつ直接支援の専門知識は持ちつつもコンサルテーションやファシリテーションなどの支援者を支援する、間接支援の技量を求められることが多いのでその内容もいれていただけると助かる。</li> </ul> <p>1日目の内容が、誰に向けて内容なのかがよくわからなかった。</p> <p>アセスメントと支援内容を発達障害者支援センターが研修できるようにという趣旨ということだったが、発達障害者支援センター職員が講義内で紹介されたアセスメントや支援プログラムの目的、内容、意義を網羅し知っていないと研修講師が出来ないのではないかと感じた。職員が学習してから研修を提供する準備時間の確保が必要と感じた。</p> <p>アプリ等具体的な内容は印象に残りました。複数回出てきたこともあるかもしれません。</p> <p>ありがとうございました。全容を知る良い機会になりました。発達障害者支援センター職員研修の導入に良いと思いました。</p> <p>網羅的、概論的であるので、一般支援者に対する研修は、各論の具体的な研修をした方が良いと思いました。パッケージで一般化するのではなく、パーツで使ったり、地域に応じた内容を加えて実施したりすると良いと思いました。</p> <p>いままで行ってきたことに加えて、必要なことや強化すべきところが整理出来ました。</p> <p>これまで、発達障害に関する研修など依頼があり実際におこなったこともあったが、どこまで知識を示すのがよいのか悩むことがあった。今回、”標準的な”プログラムを示していただいたことで、示す範囲が大変参考になった。</p> <p>ライフステージに応じた状態像や課題、支援技法のヒントを学べた。</p> <p>概要でしたが復習も兼ねて大変勉強になりました。</p> <p>リクエストになるのですが、CBTや心理カウンセリングについての内容。チェック、トゥレット、吃音、場面緘黙等への対応。多岐に渡る症状への対応が求められるため、常に情報を更新し続けたい</p> <p>各アセスメント・ツールや支援プログラムについて著作権の問題や時間の問題もあるかもしれませんが、仮想事例などを用いてアセスメント・ツール結果からこういったアセスメントとなり具体的な支援としてはこのような方法があると考えられるといった形や、支援プログラムによってこのような成長が認められたような形で紹介していただけると受講者も各アセスメント・ツールや支援プログラムについてより有効性を実感できるのではないかと思います。</p> <p>また、受講後に各アセスメント・ツールや支援プログラムについてより学びたいと考えたときに販売元の出版社や研修会の有無などの情報がまとまっているリストのようなものがあるとより普及しやすいのではないかと思います。</p> <p>学べる部分がたくさんあり、話を聞くのがやっとなかったです。後日資料等が届くとのことですととてもありがたかったです。手元に資料があるとより良かったなと思えました。</p> <p>学齢期以降に残る吃音への理解と支援についても内容に含めてほしい。</p> <p>基本が網羅されていて内容がとても充実していた。</p>

表9 本研修のプログラム内容に関する感想②

所属機関種別	4-1. 本研修のプログラム内容に関する感想（自由記述）
発達障害者 支援センター	<p>検査について勉強不足であったため、お話を伺えてよかった。</p> <p>研修内容は、各世代網羅されたものであったことは評価できると思ったが、内容が支援者の方に対して具体的でわかりやすいものかという点については疑問が残った。現場に知ってほしい発達障害に関するアセスメントと支援等の内容はたくさん含まれていたと思います。課題別の特徴、アセスメントツール、そしてアプローチのパッケージの紹介、年齢によるアセスメントツールとアプローチの内容は意味はあります。著作権や資格がからむものを、すぐできるもの、紹介して各自でやるもの、やれないものが判断できる見える化は必要だと思います。構造化の説明で実際とは違うように感じた表現があったように感じます（TEACCHの療法？視覚的構造化が明瞭化と整理統合の2つのイメージになっている）。</p> <p>今回の研修内容は多様な支援者の幅広いニーズを満たしており、このような研修形態の必要性も理解できるが、そうであればしかるべき方が講義をして頂いた動画を視聴する形でも良いのではないかと思った。</p> <p>細かく知っているものとそうでないものがありましたが、専門的な助言をおこなう部署として、おおまかに必要なものが何か把握できる今回の研修は、とても有意義でした。理解が不十分だったところもあるので、それについては地域性を鑑みて、必要なものから取り入れていこうと思います。</p> <p>自身が未熟なため、内容が多く、スピードが早く、資料がないため理解が難しかった。事例が入っていると、限られた時間でも理解し易いテーマもあった。</p> <p>自身の知識を深めることや知識の再確認にとっても役立った。地域で実践できるようにするためにそれぞれのプログラムの講習機会が増えるとよい。</p> <p>充実しました。</p> <p>全網羅的な内容で大変参考になりました</p> <p>大変充実した内容で、限られた時間での研修でだったため、手元の資料なしでついていくのが少し難しかったです。事前に資料を読んでおけるとより内容を理解しやすかったのではないかと思います。</p> <p>知識や経験年数が浅い人（0年0か月）を対象と考えた場合、内容が難しいように感じます。</p> <p>知識を幅広く得ることができた。講師により、わかりやすさや理解の深まりにばらつきがあった。</p> <p>特性ごとのアセスメント・ツールが多数紹介されており、大変参考になった。</p> <p>発達障がいの基礎的な内容がまとめられていたので良かったです。</p> <p>発達障がい者支援について網羅された内容であり、これが実際に標準として施行できるほどに支援者側が理解を伴って研修等行えることや、各発達障がい者支援センターや各機関がアセスメントやプログラムを実施できるようになると、よりよい支援になると思える。理解を伴って説明できること、アセスメントやプログラムが実際に行えるようになるには時間を要することと思うが、標準が示されたことで取り組みが明確になったと思う。</p> <p>発達障害に関する全分野の研修が盛り込んであるため、全体的に俯瞰することはできませんでした。やはり、深い内容まで知ったり、考えたりすることは難しいため、各分野の専門研修受講等が必要と感じました。</p> <p>発達障害に関わることについて網羅されていたが、もう少し一つ一つゆっくりと専門的に聴きたい。</p> <p>発達障害児者の全体像を把握するにはよいプログラムであったと思います。</p> <p>発達障害者支援センター職員には知っておくべき内容が多く研修に使用できるが、内容によっては専門的過ぎて自分が説明しない方がよいと考えられるものがある。研修者の対象によって必要な情報が異なるので、内容構成が難しいだろうなと思った。</p>

表 10 本研修のプログラム内容に関する感想③

所属機関種別	4-1. 本研修のプログラム内容に関する感想（自由記述）
発達障害者 支援センター	<p>非常に勉強になりました。ありがとうございました。</p> <p>所属は発達障害者支援センターですが、この研修を地域の誰に行うのか、どのようにアレンジするのかなどの検討は必要と感じました。</p> <p>知識の研修を求められることもありますが、放課後デイサービスや就労移行支援事業所やA型、B型事業所の職員への研修では、支援の経験や専門性の少ない職員への研修が多く、具体的に使える知識・技術を求められるため、少し内容が高度な印象です。ただ、発達障害支援を網羅した内容で、研修活動に取り入れさせていただきたいものはたくさんありました。</p> <p>ご準備大変だと思いますが、今度ともよろしくお願い致します。</p> <p>福祉、教育、医療等の分野を包括的に組み込まれており、必要な情報を得られる内容でした。</p> <p>様々な先生方がまとめた資料を紹介いただき、発達障害者支援センターの職員が学ぶには、有意義な内容であった。一方で、講義の順番など、研修会を通じての一貫性を理解する上では、やや苦慮した。強度行動障害支援者養成研修が改訂された際、研修会を通じて細切れでなく段階をおって理解が進むストーリー性が重視されたと感じたが、その点取り入れてはどうか。</p> <p>様々な分野の内容を知ることができ、自分の知識の再確認や新たな学びを多く得られた。今回の学びをより深めていく必要性を感じた。</p> <p>例えば、学校での支援など、図や写真で示されると、より理解が深まったと思う。</p>
教育センター	<p>2日間の詰め込みで、少々きつかったです。でも内容は盛りだくさんで、多くの情報を得ることができました。</p> <p>オンラインで大学の集中講義を受講しているようでした。これまでに「聞いたことがある」程度の認識であった内容もありましたが、新たに学び直しできたと思います。このように、指導主事の専門性の向上及び今後の研修に活用できる内容の研修をしていただき、感謝しています。</p> <p>さまざまな角度から、そして幼児期から成人期まで幅広く網羅しており、とても充実した内容であったと思う。</p> <p>わかりやすい内容とそうでないものがあつた。短い時間で簡潔にまとめられたアセスメント関係の講義が聞けたのはとてもよかった。アセスメントの研修の入口としてとてもわかりやすかつた。また、長時間の研修やスライドが字の羅列だと内容が入ってこないで、分かりやすいスライドづくりの工夫が必要だと思った。また、誤字も3つほど気がついた。研修時間の長さがプログラムで異なることはしかたがないが、オンライン研修の場合、15分～20分程度が適当だと思った。30分以上は長すぎて集中力が持たなかつた。このようなプログラムの必要性は常々感じながらも、なかなかこれだけ網羅的に研修を作って頂いたことはなかつた。非常に感謝します。ありがとうございました。</p> <p>研修内容は理論から指導・支援の実際、乳幼児期から高齢期までと多岐にわたり、専門性という面においては大変学びの多い内容でした。しかし、手元に資料がない状態から考えると、どの講義もテンポが速く、メモをとるのが大変でした。発達障害について、その困り感等がイメージしやすいよう疑似体験や見え方、処理の仕方等の具体があれば、現場の先生にも伝わりやすく、より良いのではないかと感じました。</p> <p>最初、どうして資料を作成された先生ではなく、別の講師の先生がされていて疑問思いましたが、誰でもその資料を使って話ができるように作成されているとお聞きし、納得しました。</p> <p>また、発達検査について初めてお聞きするものもあり、その検査がどういうもので、どのような支援につながり、活用の仕方があるのかを具体的に知ることができてよかつたです。</p>

表 11 本研修のプログラム内容に関する感想④

所属機関種別	4-1. 本研修のプログラム内容に関する感想（自由記述）
教育センター	<p>多様な内容が含まれており、各内容は研修を実施する職員は基本的に押さえていかなければならない内容として知っておいた上で、活用できるようになった方がよいと思いました。</p> <p>発達障害に関わる幅広い内容を網羅しており、大変充実したプログラムになっていると思いました。ただ、各項目の内容がどんな対象者をイメージしての内容であるかが分かりにくかったように感じました。例えば教員ですと、教員の経験年数（ステージ）、特別支援教育への理解度、おかれる立場など様々で、その状況によって学びたい内容も様々です。このプログラムのある一部はこんな対象者に聞いてほしい、学んでほしい・・・と活用する側が選択しながら活用してもよいか・・・考えながら受講させていただきました。すべてのプログラムを順に受講すべき内容となると、受講対象が見えにくいように感じます。</p> <p>様々な内容が網羅されており、充実していました。</p>
その他機関	<p>これまでに研修など受ける機会がなかった領域を含め幅広く、また実践的な内容を含めてその分野の専門家の話を聞く事ができるというのはとても貴重な機会と感じました。実際に研修で説明する側になる際には、少し時間をかけて資料を読み込み、各地域の資源を調べたり参照文献も目を通す必要があると思いますが、そのための道標もいただいでいて、安心して取り組めるように思いました。</p> <p>またプレゼンテーションの作り方、内容の伝え方も様々工夫されていて、とても参考になりました。ありがとうございました。</p> <p>とても充実した内容の研修でした。ありがとうございました。</p> <p>発達障害児者のライフステージにおける支援の在り方や様々な評価尺度についても、非常にわかりやすい内容でした。私自身、重度の自閉症児者～高機能自閉症、発達障害児者支援の現場経験を30年やってきた背景があるので、いろいろなことが繋がり、理解の後押しをしていたのかもしれない。</p> <p>現在、「療育」についても、だいたい小学3～4年生で終了となるケースが多くあります。自己理解も進まないまま、特性理解も知らせないまま、目標は「保護者の目標」に重きが置かれたままであることが多くあります。成人期になった時に、学んできた社会性の力を発揮する必要があるのに、学齢期の一定の落ち着いた時期に対して「改善した」「良くなった」と、支援の打ち切りになる場合は、ゲームへの没頭や希薄な人間関係ので、思春期以降の様々な問題（内在化・外在化）に直面していることがあります。4070・5080問題へ繋がっていることを意識し、途切れのない支援が必要であることを、全支援者が幅広く知っておく必要があると感じました。</p> <p>一つ一つの講義はとても充実していて大変勉強になりました。e-ラーニングコンテンツとしてそのまま普及・活用した方が現場の支援者の専門性向上に貢献できるのではないかと思います。</p> <p>系統化されていてとてもわかりやすかったと思います。</p> <p>座学なので、集中を保つのが少し大変だった</p> <p>自分自身研修講師をしている為、自ずと資料のまとめ方や時間配分などの方に目が向きます。大変参考になりました。</p> <p>盛りだくさんで、発達障害支援に関する内容を改めてインデックス的に知れて良かった。後は自分で学びを深めていかないと、思います。</p> <p>短時間で多くの講義が構成されており、集中が切れずに聴くことができました。</p> <p>内容が充実過ぎて、一つ一つを具体的にイメージすることが難しかった。特に現在の業務に直結しない青年期以降の支援等。</p>

表 12 本研修の地域支援における活用に関する感想①

所属機関種別	4-2. 地域支援における活用に関する感想（自由記述）
発達障害者支援センター	<p>これだけ広範囲なパッケージを我が県の市町村や事業所、学校がこの研修を聞いて自ら踏み込むかというところがかなり難しく感じる。本当に療育や支援が届かない中核都市では山間部？沿岸部？の地域イメージからは大きく離れているように感じる。これが基本はならなくて、もっと基本の部分を広く隅々に広げることが必要ではないかと感じます。できれば地域の実態で選んでできる。調整できる部分は念頭においてほしいです。</p>
	<p>これまで、健診についての研修を数年続けて実施しているが、乳幼児から学童期を対象とした市町村での支援体制のアンケートを実施したところ、健診への反映がされているとは言い難い状況が見られ、地域支援に活用できるようにするには計画やその後のフォローも必要と考える。</p>
	<p>ざっと知って頂くためには良かった。その後をどうするかが課題。</p>
	<p>どのような人（職種・経験等）を研修の対象としているのか、によって研修内容、講義レベルは調整が必要なので、画一的な内容では実用性に欠ける。現在この地域で何が課題で、どの対象に対してどのような研修が必要とされているのか、細かな課題分析、ニーズ把握の下に研修プログラムを積み重ねてきているという背景があるので、現在行っている研修に加えて全国画一で同じ研修プログラムを発達障害者支援センターが実施するというのは無理があるように思われる。</p>
	<p>どの地域でも標準的な内容の研修を受講することができるというメリットは大きいと思う。ただ、この内容で実施するにあたって講師を務める職員が内容を一定程度把握していなければ難しいこと、質問などを受けた際に答えられないなど即時的な対応が難しいことがあると感じた。</p>
	<p>ニーズに応じて、部分的に活用することから始めるとよいのではないかと感じた。まだイメージがわからない点等ありましたので、資料を基に再度確認したいと思います。</p>
	<p>活用できる部分もあったと思う。しかし、アセスメントについては実際に実施できる機関が地域に1か所以上ないと活用できないことになりそう。発達障害者支援センターそれぞれのスタンスがあり、個別のフォーマルアセスメントをとる体制があるところもあれば、そうでないところもある。</p>
	<p>具体的な実践をイメージするには、時間が足りなかったように思う。見出しを知っただけに終わった。</p>
	<p>近々の講師依頼の仕事に活かせる内容があり、とてもありがたかった。早く資料をいただきたいと思った。</p>
	<p>具体的で、継続できる研修も必要と考えており、どう実践につなげていくか、まだまだ自身の中で落とし込めずにいます。</p>
	<p>研修をどんな分野で働く人たちにどんな目的で提供するのか、よく吟味し明確にする準備時間が必要と感じた。</p>
	<p>現在、当センターのケースでは福祉・教育との連携はある一方で医療と連携しているケースが少ないように思うので、今後医療とも連携しながら地域支援をしていけたらと思いました。</p>
	<p>今回のプログラムの資料を活用して地域で研修を行うには、内容が難しすぎるように感じましたし、専門分野ごとの基礎的知識が多く、実践の場でどのように生かせばいいのかイメージがしづらかったので、地域支援での活用はかなり部分的にしかできないと思います。</p>
	<p>発達障害者支援センターの新任職員対象と考えると活用できるように思います。事例が入ると現場で使うことをイメージしやすいと思われました。</p>
	<p>受講対象者層によっては、一律に同じ内容を紹介しても、理解に差がでるため、一部カスタマイズする必要があるように思う。一方で、カスタマイズしすぎてしまっただけは、一律な知識を持った支援者を養成するというコンセプトが崩れてしまうと思う。ベアトレのプラットホームを整理した時のように、発達支援のコアエレメントを絞り込んでもいいのでは。</p>
	<p>上記と同じ</p>
	<p>前の質問で回答しております</p>

表 13 本研修の地域支援における活用に関する感想②

所属機関種別	4-2. 地域支援における活用に関する感想（自由記述）
発達障害者支援センター	<p>多岐に亘る内容で専門的な部分も多く、基本的な知識がないと理解しにくい部分もあるので、「発達障害者支援センター職員向け」「教員向け」「保健師・保育士向け」と、レベルを変えるか、「おすすめマーク」を付けてもらうなどすると良いかと思えます。</p> <p>対象像もある程度示していくといいかもしれません</p> <p>大変勉強になりました。</p> <p>知識としては幅広く学ぶことができましたが、自分で実践するためには、具体的な場面を想定したり、相談者に合わせた介入を選ぶ必要性を伝えるため、より詳しく勉強していく必要があると思いました。</p> <p>地域で研修を実施する際は、その地域の実情に合わせて本研修の内容をうまく盛り込んでいけたらと思う。</p> <p>地域における支援者養成プログラムの中で、全日程を活用するのみではなく、部分的な内容を複数年かけて実施していくようなイメージをもちました。</p> <p>地域に向け、すべてが必要とは思わないので、活用していく優先順位を再度検討したいと思えます。</p> <p>地域の支援者は職種や経験も様々なので、各地域の研修企画者側が対象者と研修内容をよく考えて設定する必要があると思いました。</p> <p>網羅的、概論的であるので、一般支援者に対する研修は、各論の具体的な研修をした方が良いと思いました。パッケージで一般化するのではなく、パーツで使ったり、地域に応じた内容を加えて実施したりすると良いと思いました。</p> <p>得られた情報を共有することで、さらに支援の幅を広げることに繋がると思えます。</p> <p>発達障がいの基礎的知識（とくに成人期以降）を知りたい地域の方はいらっしゃるのでは参考になるのではないかと。</p> <p>発達障害、知的障害、各種検査、支援法、制度等の基礎知識や経験があって受講している場合は、本研修はとても有意義であると思うが、そうでない場合に内容がどれだけ理解できるか？また講義のスピードについていけるか？という点では、受講者に合わせて時間と内容の調整が必要だと感じた。</p> <p>受講者の選定（支援の年代や所属機関などで分けて実施）も必要かなと思う。</p> <p>発達障害支援のトピックス内容として一部を活用しつつ、地域に必要なプログラムを本格的に実施することができればよいと思う。</p> <p>本研修をすべて受講すると負担となる場合があるので、本研修の一部を支援対象に応じて再構成したプログラムを用意する必要があると思う。</p>
教育センター	<p>これからは、重要視される内容です。しっかり学習していきたいです。</p> <p>教育分野以外のことについても視野の広がりを感じました。今回提供いただく資料を見直し、確実な知識にしたいと思います。</p> <p>自分が担当している業務としては、教職員向けの研修なので、地域支援という意味では、直接関わる内容ではありませんでした。ただ、インクルーシブ目指すにあたり、とても重要な内容だったので、私個人の知識の広がりとして学ぶことができよかったです。</p> <p>紹介いただいた具体的方略等のプログラムなどは、その内容や正確な実施に関わり、さらに研修を積むことが必要と思いました。地域支援においては、支援・指導の基本的内容を求められることが多く、地域における活用を考えると、支援の基本的内容、具体的実践方法の内容が必要とも感じました。ただし、この場合も、発達支援センター等の専門機関のどのような対象を想定するかで変わってくると感じます。</p> <p>地域の学校に還元していくためにも、まず我々がこの内容をしっかり理解しなければならぬと感じた。教育センター所員であっても理解度に差があるので、うまく守備範囲を振り分けるなどして、個々の専門性を活かせるようにしていきたい。</p> <p>地域の状況も考慮する必要があるため、取り入れるに当たっては工夫しなければならないのではないかと感じました。</p> <p>本研修利用について理解はできたが、やはり、実践的な支援へつなげる場合は、各機関の専門家と連携をしたステップアップ研修が必要であると思いました。</p>



表 14 本研修の地域支援における活用に関する感想③

所属機関種別	4-2. 地域支援における活用に関する感想（自由記述）
その他機関	<p>これまで専門家から研修会などで紹介してもそれ止まりだったものについて、今回のように、自治体側で全国的なスタンダードとしてこんな項目があることを知っていただけることにより、現場の支援方法の改革にもつながるという面もあるのではないかと思います。</p> <p>現在勤める地域では、福祉への理解がかなり遅れており、他業種間連携も進んでいないのが現状。今回の研修を機に、地域資源をフル活用できるだけの運動につなげていきたいと、改めて考えさせられました。</p> <p>弘前の5歳児検診は素晴らしい取り組みで、他の自治体にも勧めたいと思った。</p> <p>実際に講師等する場合、経験のない業務や分野の事をうまく説明することは、難しく原稿をただ読むだけになり、質疑にうまく答えられないと思う。</p> <p>対象外の参加だったかもしれませんが、参加でき有用な情報を頂き、感謝しています。この知見を支援者に広く周知していくと共に、臨床や支援に活かしていきます。</p> <p>地域支援の大切さを感じました。5才児健診や様々な評価アセスメントの手法、子育て支援の中でできること等、積極的にやっていきたいと思いました。</p> <p>内容的に研究者の立場からの講義内容と感じたので、発達障害者支援センターや教育センターの職員がこの資料をそのまま使用して講義することを想像した場合に、難しいように思いました。それよりも、出典を明記し</p>

表 15 本プログラムの講師を務めるとした場合に必要な資料・サポート①

所属機関種別	4-3. 本プログラムの講師を務めるとした場合の資料・サポート（自由記述）
発達障害者 支援センター	<p>それぞれの内容の詳細（目的・意義・データ等）がある程度把握できるものであれば、紹介程度は実施できる。</p> <p>1～3があれば可能であると思われる。</p> <p>スライド内容に関する解説資料が参照できる</p> <p>台本に加え、動画を含む参考資料があれば、最低限は伝達講習できると思う。</p> <p>講義する人のQ&amp;Aや、講義した際にあった課題のまとめなど</p> <p>オンデマンド形式で全国見れる部分と地域の講師でやる部分とを整理できないでしょうか。最重要・重要・必要に応じて・紹介程度もわかるとすすめやすい。</p> <p>プログラムの実際の映像や写真</p> <p>事前に研修指導を受けられると、より安心して実施できると思う。</p> <p>研修で提示されたスライドと、読み上げ用の資料があれば。</p> <p>大事なポイント、強調点を示していただけること、解説資料で変化してきている点や新しく変わってきている点など根拠を示していただけること、などでしょうか。</p> <p>研修資料と伝えるべきポイントを教えて欲しいです。研修会スライドと読み上げ用原稿、スライドの解説資料があるといいです。また、講師の方の動画などがあると実施前後に確認するうえで有効ではないかと感じました。</p> <p>研修内容はわかりやすいものが多く、知識として学ぶことができましたが、実際の自分の言葉として講義を進められるかどうかの不安はありますので、そのようなサポートとしては実践あるのみなのかどうか、と思います。</p> <p>通り一遍の説明は可能と思うが、やはり自身が実際に使用したことがないものや専門性に欠けることについて講師的な立場で物を言うのは難しく感じる。質疑などでは柔軟に答えられるとは思えない。</p> <p>解説資料や動画を見ることができるとありがたいです。</p> <p>受講者から質問が見込まれる本プログラムで紹介するアセスメントツールや支援方法等に関する具体的な研修に関する情報が必要である。</p> <p>事前の研修指導を受けられると安心です。</p> <p>内容としては、研修しておくに必要な内容ばかりだったし、それぞれが短時間にまとめられているので、機会を作って実施したいと思う。しかし、自分が講師になる場合、補足の説明や質問に答えられるだけの理解をしてないと伝わらないと思うので、その資料があると利用しやすい。</p> <p>十分に知識のない内容を話すことは不安なので、プラスアルファの周辺情報も知っておきたい</p> <p>研修する際の疑問質問に答えていただけるしくみ</p> <p>スライド資料に出てくる参考文献を参照したい。オリジナル原稿をヒントにしつつ、現場のニーズに合わせて研修したい部分を抜粋して使いたい。</p> <p>スライドとそれについての解説資料、講義の動画があればよいと思います</p> <p>一度お話しを聴いたので、スライドがあれば話せると思います</p> <p>センター内でどのスタッフも実践したことが無い検査やプログラムについて説明するというのは真実味に欠けるため、少なくとも講師として説明するには自身が経験したことがない検査やプログラムについて実地研修を受ける場が必要と思われます。</p> <p>職員の疑問に適切に答えられるかどうか</p> <p>上記に加え、受講者からの質問へ回答できるサポート体制</p> <p>研修で提示されたレジュメ、原稿、研修動画があるとよい。</p> <p>講義中に使用されていた動画も使用できるとよい。</p> <p>研修受講者の所属分野（福祉、教育、医療、行政など）ごとに、押さえておくべき重点項目、ポイントなどのコメントも入れてほしい。</p> <p>アセスメントツールについては、実際の質問紙などの見本があると理解が進むと感じます。研修原稿をいただき研修することは可能かもしれませんが、質問が出た際にこたえられるかの自信がないため、想定できるQ&amp;Aがあるといいと感じます。</p>

表 16 本プログラムの講師を務めるとした場合に必要な資料・サポート②

所属機関種別	4-3. 本プログラムの講師を務めるとした場合の資料・サポート（自由記述）
発達障害者支援センター	<p>スライドと読み原稿だけでなく、スライドに関する解説資料や専門家による動画を確認できるといいと思います。</p>
	<p>チェックボックスの1～4が最低限でもあると良いです。心配なことは、個によって解釈のとらえ間違いをしてしまう可能性があるのではと思いました。そうならないためにも、他のスタッフに聞いてもらうことが大切だと思いますが、実際そのような時間を作っていただけるのかと思うと…。所内で要検討ですね。また今年度新任でセンターに着任したのですが、日々の業務を覚えることで正直、精一杯です。これも所内で検討と思いますが、講師として動くのであれば他の業務との調整をしていただかないと、音を上げてしまいそうです。</p>
	<p>研修資料と読み上げ原稿、専門家講師の動画、スライド内容の解説資料 読み上げ用原稿がある</p>
	<p>スライドと読み上げ用原稿が使用できれば可能かと思います。また、講師のオリジナル動画や解説資料が参照できると更にプログラムの内容を予習して臨めるのでより実施しやすくなります。</p>
	<p>自身の職種や経験値による説明しづらさ（心理職以外が心理検査を説明しにくい、当事者会をしたことがない等）があるため、動画やスライド、原稿があると助かる。</p>
	<p>難しいと感じる言葉を使わないで説明をする。（カタカナ用語の羅列をしない）</p>
	<p>研修会で提示されたスライド（原稿含）、専門家動画があれば開催できると思います。根拠資料などが参照できれば一層心強いです。</p>
	<p>（質問）</p>
	<p>①研修受講者はどういった方々になるのでしょうか。発達支援に初めて関わる方、初任者研修といった捉え方でよろしいのでしょうか。</p>
	<p>②研修会を開催する場合、全ての内容を行わなければならないのでしょうか。例えば就労継続支援の方へは教育部分は除外するなど、受講者に合わせた組み合わせで行ってよろしいのでしょうか。</p>
	<p>ご教示いただけますと幸いです。</p>
	<p>PG単位で講師向け研修指導の講師リストがあると助かります</p>
	<p>スライドの読み上げ原稿や専門家講師によるオリジナル動画</p>
	<p>研修で示されたスライドと読み上げ原稿に加えて、オリジナルの動画を視聴できる環境がありがたいです。</p>
	<p>スライド内容に関する解説資料があったり、専門家講師の動画があるとよいと思います。</p>
	<p>スライドと各プログラムにおける、比較的わかりやすい参考文献があると実施しやすい。（ある程度内容を理解した上で説明をした方が実施しやすい）</p>
	<p>読み上げ用原稿が使えるとともに、解説があるといいです。</p>
	<p>読み上げ原稿もあるとうれしいですが、読むだけではその場の状況に合わせた説明は難しいと思うので、中身をより理解できるようにスライド内容に関する解説資料があるのが一番ありがたいです。その資料があれば、分からないことがあったときにより具体的に調べることや質問することが出来ると思います。</p>
	<p>資料に加えて文言があるなら自分の主観が入ることがないので話しやすいと感じた実際に使用するスライドには含まれない部分であっても、その前提や根拠などをきちんと整理する準備をしておきたい。そのために、スライド内容に関する解説資料を参照できると良い。</p>
	<p>のぞみの園の強度行動障害の研修をする際、読み上げ原稿がついていて助かったが、話される様子を聴いていないとニュアンスが取りづらかったりするので、動画が見返せたりするとありがたい。と共に自身が勉強を深める必要がある。</p>
	<p>実際のアセスメントの事例に尽きると思います。</p>
	<p>読み上げ原稿とオリジナル動画があれば参考にさせていただきたい。</p>
	<p>各手法の具体的な実践方法と効果、実践事例の提示</p>
	<p>一方向的な教材提供だけではなく、質問に答えてもらえる体制を作ってもらいたい。</p>

表 17 本プログラムの講師を務めるとした場合の必要な資料・サポート③

所属機関種別	4-3. 本プログラムの講師を務めるとした場合の資料・サポート（自由記述）
発達障害者支援センター	<p>講師を務めさせていただく際、不明なこととあった際に、サポートをくださる体制（相談窓口等）があると大変助かります。</p> <p>スライド内容に関する解説資料があると、より理解が深まるのではないかと考える。どのパートかにもよりますが、たとえば教育や感覚統合の話は職種が違うので、自分では伝えられないと感じます。動画そのものを提供して頂き、受講者に視聴させることが可能であれば、開催は可能だと思います。心理アセスメントやSSTに関しても自分が知らないことが多かったので、知らない部分について学習するための資料や研修が必要だと思います。</p> <p>事前に予習し、求められる水準を満たしているか判断して欲しいです。</p> <p>地域の支援者を対象に想定した場合に様々な職種と経験の支援者がいるため、研修内容を一部補足したり削ったりするなどして地域の状況や対象者に応じてカスタマイズする必要があるように感じたので編集可能なスライドがあるとありがたいと感じました。</p> <p>また、受講者からの質問への返答に困った時にオリジナル講師に事後相談できるサポートがあると良いと思います。</p>
教育センター	<p>スライド内容についてさらに深く調べておきたいときに、何を見ればよいのかが分かるよう、書いておいてもらえると助かります。（上の選択肢の3と重複するかと思います。）</p> <p>全研修を実施することが難しい場合、研修対象者や研修目的に合わせた研修内容パック（講座の優先順位など）の提示があると助かります。</p> <p>スライドの文言で医療に関する語句や心理関係の語句があったので注釈があるとより理解しやすいと思いました。研修中手元に資料があれば、チェックし研修後に調べれば良いことですが…。</p> <p>支援や指導のプログラムが沢山紹介されていましたが、実際の実践経験がないので、イメージ止まりなのが気になります。実際の指導支援の場面が見れたり、説明の資料があるといいなと思いました。</p> <p>研修で提示されたスライドの読み原稿が使用できること。また、どこに重点が置かれているのかが分かること。スライド内容に関する解説資料が得られること。事例があるものであれば、事例が得られ、具体的なイメージを持つことができること。</p> <p>特別支援教育における児童生徒のアセスメント、また障害特性に応じた支援の在り方を、本プログラムのスライド資料を活用して講義することができます。また、研修会で提供する資料としても活用できると考えます。</p> <p>スライドと読み上げ原稿、研修実施前に根拠となる解説資料が必要。</p> <p>1～4全てが揃うことが理想であるが1だけでもあるととても助かります。</p> <p>研修スライド及び原稿と、その裏付けとなるもの（法令や厚労省・文科省等の資料など）が分かるとよい。併せて、講師の動画を見ることができると心強い。</p> <p>動画を自由に使える、スライドをらせる</p> <p>読み原稿付きのスライド資料、現場の先生が具体的なイメージを持つことができる視覚資料（疑似体験等）、理論や定義をイメージしやすくした具体例、研修を進める上でのポイント等を示した解説、専門家講師の動画、講義だけではなく、研修効果が高められるような演習等もいくつか示してもらえれば有り難いです。</p> <p>パワーポイントのスライドと読み原稿があれば可能です。</p> <p>研修で提示されたスライドと読み上げ原稿用紙が使用できること、解説資料が参照できれば可能かと思います。</p> <p>検査用具や記入用紙など、見本として提示できる資料があるとよいと思います。</p>

表 18 本プログラムの講師を務めるとした場合の必要な資料・サポート④

所属機関種別	4-3. 本プログラムの講師を務めるとした場合の資料・サポート（自由記述）
教育センター	<p>読み上げ原稿と各スライドのブラッシュアップが必要だと思った。もっと見やすいスライドやわかりやすい解説が必要なものもあった。</p> <p>研修で使用されたスライドとともに、内容の詳細が分かる資料や説明があればと思います。また、スライドによっては、大変専門的な内容が含まれており、1枚のスライドの内容に、若手や新任の職員には、多くの説明・解説を要する場合もあると感じました。スライドのとおり研修を実施するのではなく、講師が受講者の実態に応じて選択して活用する場合の、注意事項、（していいこととしてはいけないこと）が明確であると使用しやすいと思います。具体的なプログラムやアセスメントツールの説明は、それらの研修を受講したものがなくてもよいのか、あるいは、正しく説明できるか、少し不安があります。</p> <p>提供いただいたスライドにある参考文献や資料等は、著作権等フリーとして扱わせていただければ、研修のイメージができます。後は、担当指導主事等が自分が講義できるように変更できると考えます。</p> <p>スライド資料はがあると大変助かる。できれば文字が多いものよりも、図などで表していると研修者（とくに初任者）にとってはより分かりやすいのではないかと。内容的に研修者のレベルに応じて調整できるよう、研修者のニーズ把握と実態把握をしていくことが我々講師側に求められると感じている。</p>
その他機関	<p>常に更新されていく情報のフォローが欲しいです。</p> <p>専門用語を使わない資料</p> <p>スライド並びに読み上げようの原稿があり、且つ必要に応じ講師担当者への質問の機会があることが好ましいと思います。</p> <p>まずは読む上げ原稿があれば、良いです。</p> <p>講義をする前に講習や指導があること</p> <p>スライドや資料を利用すればできると思う。全部一気に時間や内容的に難しい気がするの、パートごとにシリーズでとか、複数担当制でなど。</p> <p>スライド内容に関する解説資料が事前に参照できるとよいと思います。</p> <p>研修で提示されたスライドと、読み上げの原稿や例え話等があると良いと思います。研修をする際に、良い例が思い出せないことがあるので、いくつか事例があると受講者にも分かりやすくなると思います。</p> <p>誰でも利用できる、具体的な指導場面、療育場面、子どもの様子の動画資料とその解説</p> <p>講義で必要な項目や分野について、もう少し具体例を知ることができると助かる。</p> <p>わからないことを聞ける窓口。</p> <p>内容を絞った事前アンケートを行い、参加者が一番重要な内容を漏れなく理解し、すぐに実践できるようにすること。</p> <p>今回の研修は、支援の見本市のようなもので、支援体系についての概論がないことは、現場の支援者にとっては全体像のつかみづらい研修となっていると思います。そのあたりについて、共通した資料や研修内容があると助かります。</p> <p>研修内容として、専門家講師の講義をそのまま、e-ラーニングコンテンツとして活用し、新任・若手職員と一緒に見て、そのあと研修内容についてディスカッションしたり、事例を通して学んだことをどのように活用するかなどを協議する。</p> <p>新任・若手職員からの質問で、講師として答えられない内容については、改めて専門家講師に質問に対する回答や補足資料等を求めることができるようなサポートがあるとよいと思いました。</p> <p>講師むけの事前研修</p>

#### 4) 発達障害研修に関する課題・ニーズ

発達障害研修に関する課題・ニーズについて尋ねた自由記述回答は、各地域・機関ごとでの実態も多様であることから、本分担研究の最後に表 19-23 として示す。

### D. 考察

#### 1. 研修プログラムの開発

本研究で開発された研修プログラムは、全国で広く実施されているアセスメント・ツールだけでなく、地域により実施率の異なる検査や多様な発達特性を把握しうる検査、メンタルヘルスや行動問題など関連する諸側面を捉える検査などについて包括的に紹介するものとなった。支援技法についても、すでに各地の発達障害者支援センターや教育センターで研修が実施されているものもみられる一方で、特に発達障害児者の社会性を向上させる専門的な支援技法

(JASPER や PEERS 等) はその重要性が高いものの、我が国における認知度はまだ低く、本研修の普及により発達障害児者の理解と支援に関わる支援者らの知識の向上に寄与することが期待される。また支援に関しては幼児期や児童期といったライフステージごとに、適応行動や社会性などの要因に分けて必要な要素を提示しており、支援者らがそれぞれの業務範囲の内容を受講しやすくなっている一方で、関連する前後の年代の内容を学ぶことも可能となっている。一方で、発達障害児者の多面的な理解や社会生活における多様な支援技法を扱っていることから、一つ一つのアセスメント・ツールや支援技法について内容を深めることが難しいものとなっている。本研修プログラムはあくまでも発達障害児者支援に携わる支援者や職員を対象に、発達障害の理解と支援の全体像を捉え、発達特性や適応行動、メンタルヘルスなどの関連する要因を把握した上で効果的な支援を策定するための知識獲得をねらったものであるため、各アセスメント・ツールや支援技法についての習熟

が期待できるものではない。

#### 2. 研修プログラムの内容的妥当性

発達障害に関わる専門家・支援者らを対象とした試行的研修 2 回の実施とアンケート結果から、パートごとに難易度やわかりやすさの評価は分かれたものの、概ね発達障害児者の理解と支援について網羅的に把握できる研修として評価を得た。また開発された研修プログラム資料については、各パートの資料作成担当者だけでなく、担当以外の研究代表者・研究分担者らが講師を交代で務めたこと、内容や表現の齟齬が無いように、各資料に講師が読み上げる原稿テキストを記述したことにより、発達障害者支援センターや教育センターの職員が各地域で研修を実施する講師を担う際に活用しやすい研修資料が開発された。なお、本研修で取り上げるアセスメント・ツール等に関しては引用情報の記載だけでなく、検査や書籍の複製掲載など必要な部分については各出版社等に掲載許諾の確認を得ており、今後地域で本研修資料を支援者向け研修として活用することについても許可を得た。

#### 3. 発達障害児者の支援に関する標準的な研修プログラムの効果検証

発達障害者支援センターや教育センター職員らを対象に計 4 回実施した本研修プログラムのオンライン研修に関する事前事後アンケートの検証の結果、各アセスメント・ツールや支援技法、ライフステージにおける課題や支援に関する理解について参加者の事後アンケートでは認知度や内容理解の回答の割合が増加した項目がみられ、本研修プログラムの受講による一定の効果が確認された。特にアセスメント・ツールについてはほとんどの項目で認知度や内容理解についての有意な向上がみられ、発達障害児者の理解と状態把握の促進に寄与するものと思われる。一方で、一部では事前アンケートから事

後アンケート回答の方が否定的な回答に変化したとみられる項目もあった。これについては、認知度が非常に低い項目ではみられず、一定程度認知度や活用度のある項目で悪化したような現象がみられること、自由記述によるコメントに関連する表現が見られることから、事前アンケートに置いては参加者が該当するアセスメント・ツールや支援技法等を習得し実施していたと思っていたものの、本研修プログラムを受講することで参加者自身の認識が十分でなかったなどの振り返りを行うケースがあり、そうした反省が一見すると回答の悪化という現象につながったものと推察される。

WISC-IV や構造化・視覚支援等の全国で広く用いられている検査や支援技法については比較的周知や活用がなされている傾向がみられた一方、多様な発達障害特性の把握やメンタルヘルス等の関連要因のアセスメント、支援技法では発達障害児者の社会適応で重要となる社会性の支援についての専門的な技法について、まだ我が国での認知度が十分でないこともあり、今回参加した支援者らの認知度や活用度も低いことが明らかとなった。これは発達特性の多面的な把握や社会性の支援に関する研修がまったく実施されていないということではなく、各センターでそれぞれにアセスメントや支援の研修を実施されているものの、新しく開発されたエビデンスのあるアセスメント・ツールや支援技法を扱った研修が少ないことが推察される。参加者の自由記述からうかがえる実態からも、すでに多くの業務を抱えている状態で、多岐にわたる発達障害理解と支援に関する知識やスキルの習得に時間を書けることができていない問題もうかがえた。現在の発達障害支援では個別の支援機関・支援者のみによる支援ではなく、多機関・多職種連携が求められていること、また支援者・職員の主観的判断や経験によらず根拠のあるアセスメントや支援技法の提供、支援者・職員の知識と支援スキルの向上のためにも、エ

ビデンスが確認された効果の高い標準的なアセスメント・ツールや支援技法を用いることが推奨される。本研修プログラムの目的を踏まえた各地域での研修実施への活用により、医療・教育・福祉の支援者や職員らが共通理解を持つことを促進するものであり、その上で各地域・各機関で連携しながらできる発達障害児者のアセスメントや支援体制の構築の取り組みを促すものと期待される。

なお、効果検証の結果について、今回の参加者はその多くが自ら発達障害情報・支援センターの研修情報を閲覧して受講した者か、各センターに送付した研修案内を見て申し込んだ者であるため、一般的な職員よりも発達障害に関する研修に関心が高く主体的に取り組む傾向のある者であると想定される。そのため今後の普及にあたり、各地域の発達障害者支援センターや教育センターの職員らが講師を務める際には、研修内容や講師経験が十分ではないことから研修効果の低下も見込まれる。一方で、今回は開発中のため配布資料がない状況で受講したが、今後は開発された本研修プログラムの資料を参加者に配布することが可能であることため、参加者が内容を確認しつつ受講することが可能になるとと思われる。本研修プログラムの普及にあたっては、引き続き本研究のコンソーシアム・メンバーで取り組んでいく。

## E. 結論

本研修は、福祉・教育等の現場で支援に携わる職員を対象に、発達障害支援に関わる幅広く多様な知識やアセスメント・ツール、支援技法について概要を知ることが目的としているため、効果検証の結果から、本研修プログラムについて受講者の認知度を向上させる効果があった。

また、研修実施終了後に本研修プログラムの普及方策について検討を行い、今回実施した4回の研修に参加した職員がいる発達障害者支援

センターと教育センターには、各センターでの研修が実施可能となるように本研修の修了証と研修資料（PowerPoint ファイル、PDF ファイル）を送付した。また、各センター職員が講師を務めることをサポートする目的で、資料作成担当者（研究代表者・研究分担者ら）による研修動画を録画し、発達障害情報・支援センターのポータルサイトに置くことを予定している。また、各地域での実施において自由記述等で懸念として挙げられている質問への対応については、各地域の研修講師が対応するものではなく、質問を発達障害情報・支援センターに集約した上で、本コンソーシアム・メンバーの専門家が返答案を作成するなど、講師をサポートする体制整備も検討している。発達障害者支援センターや教育センターの職員等が講師となって本研修プログラムを各地域で実施することにより、我が国での発達障害児者支援に関する研修の促進と支援者の知識向上に寄与することが期待される。

#### F. 健康危険情報

##### 【データ分析・報告書執筆】

高柳 伸哉 愛知東邦大学人間健康学部准教授

発達障害支援に携わる専門家・支援者・機関職員の任意参加による研修会と事前事後アンケートの任意の提出のみであること、支援機関を対象とした郵送による悉皆調査で紙面による説明と不利益のないことの明記などから、本研究において健康に関連した危険情報はなかった。

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

なし

##### 2. 学会発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

##### 1. 特許取得

なし

##### 2. 実用新案登録

なし

##### 3. その他

なし



表 19 発達障害支援における課題・ニーズ①

所属機関種別	4-4. 発達障害支援における課題・ニーズ（自由記述）
発達障害者支援センター	<p>診断のない、または障害者支援を望まないケースへの対応と社会資源</p> <hr/> <p>研修内容の均てん化は、非常に大きな課題だと思っていましたので、大変貴重な機会を頂きました。ありがとうございます。発達障害情報・支援センターの講義で紹介がありましたが、本内容が、経験年数等で求められる能力を整理したシラバスと連動すると、なお良いかと思えます。</p> <hr/> <p>カップルの相談、高齢世帯、ひきこもり支援、中学生以上の自己理解やSSTグループ</p> <hr/> <p>個別支援計画はそれぞれの分野で名前は違ってはいるが存在するが、特性を軸にした支援計画が少ない。行動ばかりに着目しすぎる。また、特性を軸にした一貫した視点での移行がうまくいっていない。講義や演習中心の研修では現場での支援の向上にはつながりにく、しかし、まだコンサルテーションという仕組みの活用のイメージが地域に少ない。</p> <hr/> <p>小学生のときに特性に合わせた十分な支援を受けられず、不登校になった中学生のケースが多いです。本人は対人関係にトラウマがあり、身近な居場所につながりにくいことが課題です。</p> <hr/> <p>不登校、引きこもり等の場合、長期的な視点での支援がないことが多く、地域に繋ぎにくいことや、まだ初年度のセンターでありスタートが緊急事態宣言下であったため、市町行政や地元の法人との関係構築が十分にできていないことがあります。取り組み中ではありますが、市町に発達障害を受け止める窓口がワンストップでないので、発達障害児者支援体制の県、圏域、市町の三層構造を作っていくと思っています。直接支援と間接支援の割合や、行政的に支援の量の評価はされるけれども質の評価はされにくいことなども懸念事項かと思っています。スタッフ育成も課題だと思っていますので、このような研修があることはスタンダードとしてありがたいと思いました。</p> <hr/> <p>成人期の相談は増えています。年齢も幅広くなってきたと感じます。企業からの相談もあり、結果仕事を転職するケースもあります。</p> <hr/> <p>気軽に（時間的にも立場的にも）受けられるSVなどの機能がほしい。</p> <hr/> <p>予約から初回来所までに平均2ヶ月程度お待ちいただいている状況を心苦しく思っています。また、二次障害で精神疾患を発症されている方に対して、発達障がい支援を行う福祉の立場としてどう関わらべきか悩むことがある。</p> <hr/> <p>当センターは相談中心の業務に留まっており、強度行動障害がある方への支援などのニーズに対応できる職員の育成、専門性を高めることが課題となっている。</p> <hr/> <p>人事異動により積み上げが難しく、専門性の担保は課題です。</p> <hr/> <p>・学校等で特別支援学級の増設に伴い、指導できる教員の不足・専門的な療育機関が少ないので、思春期の子どもが相談・利用できる場所がない</p> <hr/> <p>成人期の就労支援、引きこもり支援など。強度行動障害等の日中の居場所、ショートステイの資源の問題</p> <hr/> <p>心理検査実施の認識についてとまどうこと：診療報酬で有料で心理検査を受ける場合と当センターで無料で心理検査を受ける場合の明確な違いを見つけられていないこと。現在は当センターが支援計画に必要と判断した場合に行うこととしている。</p> <hr/> <p>発達をみることが出来る専門的な診療所が少ない。ペアトレは少しずつ浸透しているが、もっと広げていきたいと思っている。ペアプロなど家族支援についての新しいプログラムを拡げていきたいが、地方からは研修に行きづらい。</p> <hr/> <p>既存の制度の中では支援が難しく、結果としてセンターが相談を抱えざるを得ないケースが多い。強度行動障害のある人の受け入れ先のなさ（そもそもの数的な問題）</p>

表 20 発達障害支援における課題・ニーズ②

所属機関種別	4.4. 発達障害支援における課題・ニーズ（自由記述）
発達障害者支援センター	<p>上記しましたが、常に新しい知識を標準的に持っておきたいと思っております。加えて、面談技法についてもバージョンアップさせたいです。</p> <p>都内の各自治体によって行政の組織体制や人口規模、地域の特色なども異なるので、それぞれの自治体の特色を活かした取り組みについての検討がなされている。児童期については児童発達支援センターの整備が進んでいるところと遅れているところがあり、予算が少ない区市では既存の療育施設をなんとか児童発達支援センターにしていこうと工夫・努力している。学齢期では福祉と教育の連携に課題を持つ自治体が多い。成人期においては、相談できる専門機関・窓口を設けている自治体が増えてきていますが、まだまだ取り組みに差が見られます。自治体によって発達障害支援の取り組み状況がかなり異なるので、他の自治体の取り組み状況を知りたいという声や支援体制整備に関する助言を求める要望が多い。それ以外にも自治体や地域の支援機関などからの研修講師の派遣依頼やケース会議での助言などの依頼が増えている。都のセンターとしては今後も各自治体や関係機関と連携しながらバックアップする役割が求められている。</p> <p>障害福祉サービス事業所が急激に増加し、ネットワークや連携が難しい</p> <p>「支援がなくてもできるようにならないと社会では通用しない」などと言われる支援者も少なくないのが現状。支援や配慮についても、『特別扱い』と捉えられていたり、自主性や積極性を育てるというフレーズだけで支援が準備されていないことも多々ある。支援者（特に、福祉事業所の管理職や教職員、行政職員）は、それぞれの持つ資格や経験、プライド？信念？などもあり、多職種からの介入を受け入れられない傾向もあるように感じる。支援者の認知、行動の変容へのアプローチがとても難しい。基本的な障害特性や支援の考え方の共通理解が図られない状態では、連携、役割分担も難しい。</p> <p>企業からの成人期の相談が増えていますが、継続雇用に至らないことも多いです。企業の理解をどのように深めていくか、発達障がい者支援センターとして企業に対してどのような研修ができるのかが課題だと感じています。</p> <p>各ライフステージに応じた継続性のある支援施策の充実や支援者の資質の向上が図れるための取り組みが必要だと考えています。</p> <p>特別支援学校を含む、教職員の理解・啓発です。講義では若手、新任に向けてとありましたが、元現場にいたものとして若手や新任に限定するのはどうかと思いました。管理職をはじめ、中堅教職員の学び直しも必要と思います。過去の経験や積み重ねで得たものは多いと思いますが、そこでの捉え方や見方に固執してしまい、他の角度で捉えることが果たしてできているのかと思うことがあります。思うような支援や授業ができず、身動きがとりずらくなって苦しんでいる様子を聞くと、どうにかならないものかと思えます。</p> <p>県の発達障害者支援の方針・施策をいかに市町村行政や教育現場、福祉支援や就労現場などの裾野に広げ、支援体制を整え、人材を育成していくかが課題。まだまだ行き届いていない現場が多く、長い道のりの途上と感じる。</p> <p>管轄県内の市町村行政機関の支援を行う際にどのようなサポートが必要かを検討し研修に取り組んでいます。今回のプログラムが何を伝えていったらよいかを検討する助けとなりました。ありがとうございました。</p> <p>公開している当事者会や配偶者の会がないこと（問い合わせの際に紹介できない）。強度行動障害ある人の支援体制づくり。</p> <p>生活介護やグループホームのコンサルに入っているが、何年もASDの方への分かりやすい環境がなされておらず、自由という名のもとに思うがまま過ごされている状況をどこからテコ入れしていくのか悩んでいる。</p>

表 21 発達障害支援における課題・ニーズ③

所属機関種別	4-4. 発達障害支援における課題・ニーズ（自由記述）
教育センター	<p>日々の関わりがある児童生徒を対象としていないため、対象児童生徒の実態把握を短期間に的確に行うことが必要だと感じている。保護者からの情報や本人への聞き取り、観察などから得られることだけでなく、対象児童生徒の在籍校や利用している放課後等デイサービスなどの福祉機関との連携が必要であり、様々な視点から対象児童生徒の実態を把握しなければならないが、実際には難しさも感じている。</p> <p>私は、特別支援教育は、ネットワークとチームワークの教育と思っております。しかし、実態として、課題に挙げられるのが、各学校の支援体制づくりが確立していないことです。特学担当者だけで、悩みを抱えている学校も多く見られます。今までもそうでしたが、校長のリーダーシップのもと、特別支援教育の充実を図っていきたいと考えています。私自身としては、学校からの依頼で、講義しに行くことも増え、支援体制づくりの重要性を広げていっている最中です。</p> <p>書籍、SNS上等でも発達障害に関する情報はたくさん取り上げられており、情報を必要としている関係者が、何を選択するか状況が左右されている。学校現場、保護者もそうである。情報を簡易に入手できる、いろいろな人とつながっていける状況は望ましいが、当事者を取り巻く人々が連携する際には実際の生活上の支援（見える状況）を整理し支援を考えていくしくみもやはりこれからは改めて必要になってくるであろうと思いました。生涯にわたっての支援が継続していけるようにするためには、その成長段階等に応じて、メンターとなる人材の育成が必要になってくるのではないかと思います。</p> <p>実情や支援方法等に関する具体例を示す際に、信頼性が高いデータやエビデンスを収集するのに時間を要する。今回の研修における資料はありがたい。</p> <p>経験年数の浅い若手の教員が特別支援学級や通級指導教室を担当するケースが増えており、障害特性や困り感、子供の発達、自立活動や合わせた指導等、特別支援教育について専門性の向上が必要である。また、センターとしては、若手教員の専門性の向上に寄与する研修講座の企画運営に努めているところです。</p> <p>多職種との連携（教員とスクール・カウンセラー、スクール・ソーシャルワーカー、福祉関係の指導員など）の在り方、発達障害のある子の二次障害（不登校や引きこもり）</p> <p>個別の指導計画や個別の教育支援計画の活用による適切な支援の提供及び評価の実践。</p> <p>今回の研修を受講して改めて感じたが、発達障害支援は非常に多岐に渡り、広い範囲の知識や技術等が必要である。この分野の学習には時間がかかるが、現場ではその時間の確保が容易ではない。短時間で研修でき、分かりやすい、もっと知りたくなる、自己研鑽の入口としてのパワポ資料の作成をお願いしたい。</p> <p>発達障害に関わる研修は、全ての校種に必要であり、受講者の状況に応じて実践的具体的内容をもとに研修を行うようにしています。昨年度より高等学校教員（特別支援教育コーディネーター）は福祉関係機関（支援機関）との合同研修を実施し始めました。立場によって受講ニーズが異なるため、一斉に実施する講義内容は選定が難しいです。そのため、演習やグループ討議を中心に行っています。</p> <p>教員のステージ研修では、必ず特別支援教育に関する研修を実施しています。通常の学級の担任は発達障害についての基礎知識が必要であることから講義と演習の内容を実施していますが、今回のプログラムの中に活用させていただきたいスライドがたくさんありました。しかし、1つの項目すべてを1回の研修でやりきるには、内容が難しく思いました。また、聴講するだけでは理解が深まらず、その場で聞くだけにとどまり、実践に結びつかないことになってしまうのが課題です。</p> <p>学校の教職員の理解がまだまだ低いことです。研修しても、担当者が変わると継続されません。学校全体で取り組める仕組みを作っていききたいです。</p>

表 22 発達障害支援における課題・ニーズ④

所属機関種別	4-4. 発達障害支援における課題・ニーズ（自由記述）
教育センター	<p>教員の理解・支援のスキルにかなり差があり、理解がすすまない。特に40代以上のベテラン層に対し、どう伝えればいいのか試行錯誤している。またそのような教員と校内で連携していかなければならない特別支援教育コーディネーターのスキルアップも課題である。</p> <p>学校現場では（特に中・高）旧態依然とした生徒へのかかわりをしている学校が多く、そのような指導で苦しくなって教育センターにつながるケースも多い。教育センターは教員の研修だけでなく、児童生徒・保護者や学校の支援も同時に行っているため、より専門的な知識を身につけるよう、一層自己研修に励みスキル向上を図ることが求められている一方、行政機関としての限界もあり、もどかしさも感じている。</p>
その他機関	<p>管理職も含めたスタッフの、発達障害そのものに対する理解の促進。</p> <p>人材育成の体系化を手掛けている段階で、まだ全く安定していません。また、対象となるスタッフが多い為、指導ができるスタッフを増やさないと、到底課題に追いつかない現状があります。</p> <p>保育所等訪問支援、巡回相談員整備事業等で地域を巡回しているが、訪問先やそれを管轄する行政が人が変わる度に制度に対する認識が異なり、スムーズに支援が開始出来る場合とそうで無い場合がある。対象児への直接支援以前に関係者の制度に対する理解等が必須であり、課題であると感じている。（支援者間の制度に対する認識の共有と連携が課題）</p> <p>医者の発達障害に対する考え方に相違があり、診断がついていない対象者がいる。病院と支援学校が隣接していて、支援スタッフには恵まれている。それを活かした支援システムの構築が課題である。</p> <p>巡回支援専門員整備事業とペアレント・プログラムを自治体の委託業務として実施しています。どちらも高いニーズがありますが、ペアレント・プログラムは、幅広い年齢（1歳～高校生）の保護者が来られます。その中で、発達障害の診断を受けている方が半数程度いらっしゃるため、ペアプロを受講されたあとは、ペアトレへと繋ぐようにしています。しかし、ペアトレは、①診断名、②幼児（知的障害があれば小2まではOK）、③特定の医療機関からの紹介、④場を乱さない保護者、⑤全講座参加できること、という5つのハードルがあり、ほとんどの方が受講できない状況です。今回の専門家研修会を受け、発達障害者支援センターのスタッフの方には、ぜひとも発達障害児者のライフステージに合わせた（年齢の幅を持った）支援ができるよう支援体制を整えていただきたいと思います。</p> <p>若い支援者の育成、青年期以降の公的支援との連携</p> <p>公務員であり、およそ三、四年で異動になるため、職場での知識や経験がなかなか積み重なっていかない。</p> <p>今年度はコロナの関係で、消毒、安全体制、人数制限をどうするか等々の対策に追われている。ペアレントトレーニングを何とかやったが、ロールプレーはやらない等の制限も行わざる得なかった。</p> <p>学齢期には、日頃の個別支援、計画の策定、報告等学級担任の負担が大きい。就業後は、特に障害者雇用でなくても、職場の上司がその発達障害を持つ対象者をうまく受け入れアドバイスし、良さを認めてくれるかどうかで、続けられるか否かが変わってくる。よき事例を集めるなどしても良いのかもしれないと感じる。中には有用な資格がありながら人間関係でトラブルになり転職を繰り返す例もある。私の勤務するところの電話では、その都度気持ちを聴き、具体的な対処法をアドバイスしている。</p> <p>18歳以降の受け入れ先がない。</p>